



異なる人類 35種族の歴史



2019年版

大本正

◆異なる人類・35種族の歴史（生年順）

■エスの歴史（容姿オラン・ペンデク 沖縄人、マヤ人の祖）

エスはすべての人類の祖であり、400万年前にタンザニアの海岸で水生類人猿として生まれた。エスの背丈は140cmほどで、全身を毛で覆われた小型獣人オラン・ペンデクの姿をしていたが、大型哺乳類を狩るようになると、身体は160cm～170cmにまで肥大し、沖縄人、マヤ人の祖となった。

■カゾオバの歴史（容姿キジムナー 中央アジア人の祖）

カゾオバは妖怪キジムナーの先祖であり、背丈は1mほどで毛深かった。大型哺乳類を狩ることで1mから170cmくらいに巨大化した人々は中央アジア人の祖となった。

■キブウカの歴史（容姿河童 エーゲ人、インド人の祖）

キブウカは河童の先祖であり、背丈は50cmほどでペンギンのように水中を跳ぶように泳いでいた。大型哺乳類を狩るようになった人々は身長が50cmから160～170cmにまで巨大化し、エーゲ人やインド人の先祖となる。スパイス文化、ヨーガ、アーユルヴェーダ、カーマーストラなどのインド文化は彼らが開花・発展させた。

■サグバタの歴史（容姿河童 アナトリア人、インド人の祖）

サグバタはキブウカと同様に河童の先祖である。身体的特徴も同じである。

■ナナブルクの歴史（容姿ニンフ ラテン人の祖）

ナナブルクはニンフの祖であり身体的特徴は他の小人一族と同じである。大型哺乳類を狩ることで巨大化したナナブルクは、50cmの身長が170～180cmにまで伸び、白い肌、茶髪、茶眼をもち、背が高いラテン人の先祖となる。

■ムンビの歴史（容姿キジムナー インド人の祖）

ムンビはカゾオバと同じ身体的特徴を持ち、合体してキジムナーの先祖となる。ムンビの名はムンバイに残っており、大型哺乳類を狩ることで身長が170～180cmにまで巨大化した人々

はインド人の先祖となった。

■アブクの歴史（容姿ピグミー族 パプア人/パグ族、バントゥ族の祖）

アブクは身長が140cmほどで愛嬌のある顔をしていた。ピグミー族の先祖であり、身長が3mの獣人コットスと合体することで、身長が180cm～2mになり、いわゆるバントゥ族（一般的アフリカ人）の先祖となった。

■ムワリの歴史（容姿ピグミー族 パプア人/ムユ族の祖）

ムワリはアブクと同じ身体的特徴を持ち、アブクと合体することでピグミー族の祖となった。アブク+ムワリ=パグ+ムワ=ピグミーとなる。

■モリモの歴史（容姿ネグリト族 ミャンマー少数民族/マルマ族の祖）

モリモはアブク、ムワリと同じ身体的特徴を持ち、東南アジアの小人族としていられているネグリトの先祖となった。モリモの名はモルモン教に継承されている。

■ルハンガの歴史（容姿オラン・ダラム ミャンマー少数民族/パンコー族、バントゥ族の祖）

ルハンガは世界最強の捕食者として古代ビクトリア湖に生まれた。容姿は東南アジアに生息するオラン・ダラムと同じであり、厚い体毛に覆われ、身長は最大4mを誇った。彼らは最強の捕食者という名に恥じぬ、比類なき身体能力を備えていた。その怪力で6mのクロコダイルを素手で狩り、主食としていた。地球の王の一族である。パンコー族はミャンマー人に吸収されてしまい、現在、オリジナルのパンコー族はマレー人にオラン・ダラムと呼ばれている。パンコーは、盤古（パングア）の語源でもある。

■チュクウの歴史（容姿イエティ ミャンマー少数民族/チャク族の祖）

チュクウは世界最強の捕食者ルハンガの後継として古代ニジェール流域に生まれた。容姿はヒマラヤに生息するイエティに似ていた。チュクウは最大伸長4.5mを誇り、ルハンガの巨軀を凌駕していた。ニジェール流域でクロコダイルをエサにしていた彼らは時には素手でライオン、象をも狩りの対象にした。地球の王の一族である。チャク族はミャンマー人に吸収されてしまい、現在、オリジナルのチャク族はヒマラヤの住民にイエティと呼ばれている。

■クウォスの歴史（容姿アボリジニ）

クウォスは原初の神カオスを生んだ知的な種族であり、世界で最初に野生動物を家畜化した。馬、駱駝、牛、豚はみな、彼らが古代アメリカ大陸から連れてきたものだ。容姿としてはオーストラリアのアボリジニと同じ姿をしていた。

■ヴィディエの歴史（容姿ヴェッダ族）

ヴィディエはイデュシアを生んだ。彼らもクウォスと同じく知的な人々であり、イデュシアは「ユダヤ」の語源にもなった。

■ムシシの歴史（容姿パプア人/ササク族）

■レザの歴史（容姿ミャンマー少数民族/ラシ族、リス族）

■ウェネの歴史（容姿アイヌ族）

アイヌ族の正体は、オリジナル人類ウェネである。彼らはただの少数民族ではなく、非常に古いタイプの人類であり、超古代には日本列島だけでなく、東南アジア、現イランにも住んでいた。

■オロクンの歴史（容姿コイサン族 ミャンマー少数民族/アラカン族、シベリア人、中国人、朝鮮人、日本人の祖）

オロクンはコイサン族のような姿をしていた。アフリカから古代シベリアに移ってからは冷たい海で水生生活を敢行した。そのために目は細く、顔は平坦になり、四肢は短くなった。彼らはシベリア人、東アジア人（中国人、朝鮮人、日本人）の先祖となった。

■オロルンの歴史（容姿コイサン族 ミャンマー少数民族/アロール族、アマゾン少数民族/アララ族の祖）

■カアングの歴史（容姿コイサン族 ミャンマー少数民族/カヤン族の祖）

■ジェンギの歴史（容姿コイサン族 ミャンマー少数民族/シャン族の祖）

■ワルムベの歴史（容姿ミャンマー少数民族/モブワ族）

■イマナの歴史（容姿ミャンマー少数民族/マノー族、マニ族）

イマナはベトナム少数民族の容姿をし、東南アジア人の原型を準備した。ひとことで東南アジア

人と呼ぶが、いわゆる東南アジア人は多数のオリジナル人類の混血である。

■エバシの歴史（容姿アパッチ族）

アパッチ族の正体は、オリジナル人類エバシである。彼らはインディアンの一部族ではなく、非常に古い類の人類であり、超古代には蝦夷（えびす）だけでなく、北アメリカ（アパッチ）、マヤ（太陽神アプチ）にも住んでいた。ただ、後世になり、タナトスの一族に属するディネ族に篡奪された。残虐で頭の皮を剥いだりするアパッチは、じつはディネ族である。

■キャラの歴史（容姿パプア人/カウレ族）

■トレの歴史（容姿ドラヴィダ族 パプア人/トル族の祖）

■ニャメの歴史（容姿マダガスカル人 台湾少数民族/アミ族の祖）

ニャメは、イマナと共に10万年前にアウトリガーカヌーを完成させ、インド洋を横断してマダガスカル島にまで足を伸ばしていた。世界初の船舶を開発し、長距離の航海を実現させた種族である。マダガスカル人は彼らの子孫であり、高天原時代の人々の面影を現代に伝えている。

■モディモの歴史（容姿アラビア人 人魚の祖）

モディモは水中生活に特化した、いわゆる「人魚」の正体である。頭部は小さく、手足は長い
ため、身長は180cm～190cmと高い。一部はアラビア人の祖となったが、一部は未だに
人知れず、水生生活を続けていると考えられる。アドメテー、メーティス、ティアマト、テテ
ュスなど水に纏わる海洋神などを多く生んだ。

■シルックの歴史（容姿黒人 シルック族の祖）

シルックは50万年前に湖水地方で生まれた。水中生活に特化していたため、頭部は小さく、手
足が長くなり、身長は2mを誇った。アフリカから古代ヨーロッパに移ってからは背の高い金髪
・碧眼の白人の祖となった。オリジナルのシルックはシルック族と呼ばれ、現在でもナイル流
域（スーダン）に住んでいる。

■ディンカの歴史（容姿黒人 ディンカ族の祖）

ディンカは50万年前に湖水地方で生まれた。水中生活に特化していたため、頭部は小さく、手
足が長くなり、身長は2mを誇った。アフリカから古代ヨーロッパに移ってからは背の高い金髪

・碧眼の白人の祖となった。。オリジナルのディンカはディンカ族と呼ばれ、現在でもナイル流域（スーダン）に住んでいる。

■ハダメの歴史（容姿ソマリア少数民族/ハダメ族）

ハダメは50万年前に湖水地方で生まれた。水中生活に特化していたため、頭部は小さく、手足が長くなり、身長は2mを誇った。アフリカから古代ヨーロッパに移ってからは背の高い金髪・碧眼の白人の祖となった。。オリジナルのハダメはハダメ族と呼ばれ、現在でもアフリカ（ソマリア）に住んでいる。

■マサイの歴史（容姿黒人 マサイ族の祖）

マサイは50万年前に湖水地方で生まれた。水中生活に特化していたため、頭部は小さく、手足が長くなり、身長は2mを誇った。アフリカから古代ヨーロッパに移ってからは背の高い金髪・碧眼の白人の祖となった。。オリジナルのマサイはマサイ族と呼ばれ、現在でもアフリカ（ケニア）に住んでいる。

■ムルングの歴史（容姿ミャンマー少数民族/ムル族）

ムルングは50万年前に湖水地方で生まれた。水中生活に特化していたため、頭部は小さく、手足が長くなり、身長は2mを誇った。アフリカから古代ヨーロッパに移ってからは背の高い金髪・碧眼の白人の祖となった。。オリジナルのムルングはムル族と呼ばれ、現在ではミャンマーに住んでいる。ムルングは、ディンカと共にミャンマーに合体部族トゥングル族を生んでいる。トゥングルの名は天空神テングリや謎の騎馬民族丁零（ディングリング）の由来である。

■ザムビの歴史（容姿ミャンマー少数民族/チャム族）

ザムビはシルック・ディンカの系譜に連なる比較的新しい人類であり、7万年ほど前に陸上生活にスイッチした。ノアの息子セムの先祖である。

■ンジニの歴史（容姿セネガル人）

ンジニはシルック・ディンカの系譜に連なる比較的新しい人類であり、4万年ほど前に陸上生活にスイッチした。セネガル人の容姿をしており、シンド、イシン、秦の語源となった。ンジニは秦の時代にダヴィデの一族の血統に取り込まれた。

■イサックの歴史（容姿ソマリア少数民族/イサック族）

イサックはシルック・ディンカの系譜に連なる比較的新しい人類であり、BC 40世紀頃に陸上生活にスイッチした。オリジナルのイサックは、イサック族として今でもソマリアで暮らしている。聖書の家族イサクの先祖である。

◆まえがき（※2018年版のまえがきを流用）

名前を知って歴史を知るという方法は、新しい名前を知る度に全貌が変わっていくという弊害がある。だが、名前を知り尽くした感があるので、これ以上変わることはないのではないかと考えられる。詳細を詰めるだけで、ほぼ完全な人類の歴史である。

「多摩市のカッパ」

今回は、妖怪として知られるカッパの正体も追及している。通常、カッパと聞くと「想像上の生物」という認識が根強い。しかし、カッパの目撃談は豊富に存在している。民俗学の分野から、目撃談を集めた数冊の本も出ている。じつに、カッパの目撃談は日本全国に及んでいる。これだけ、多種多様な報告がされているのは、知られざる何者かが存在している証だろう。

彼らを見ていないから、彼らを知らないから、彼らは存在しないということにはならない。

古来から「カッパ」と呼ばれている人々。彼らは、いったい誰なんだろう？ただ、カッパの目撃談は、戦後すぐに語られなくなった。そんな中、筆者は多摩市でカッパらしき謎の小人を目撃した。

筆者は、AD1992年当時、東京都多摩市聖ヶ丘に住んでいた。多摩ニュータウンである。聖ヶ丘の頂上に住んでいたが、身体を鍛えようと自転車で毎日、急な坂を下ったり上ったりしていた。聖蹟桜ヶ丘から電車で練馬区まで出勤していた。下りは3分だが、上りは20分かかる。

ある日、駅に向かおうと家から下り坂を颯爽と下っていた。すると、坂の途中に養護学校がある。そこに差し掛かる直前、インド人ぽい肌色の非常に小さい男と目があった。どこに向かおうとしていたか不明だが、彼は、坂を歩いて上っていた。通常、聖ヶ丘の上の方では、歩いている人を見かけることはない（自転車に乗っている人もいない）。

信じられないことに、男の背丈は常人の膝くらいまでしかなかった。筆者は「え？」と思った。当然だろう。しかし、筆者はそれまでも多摩ニュータウンで何度か霊を見たり、不思議な体験をしていたので、これもその現象のうちの一つと思った。或いは、養護学校の人かとも思った。ということで、失礼に当たると思い、あえて振り返らなかった。

しかし、今考えると、彼はカッパだったのかもしれない。聖ヶ丘は、端正な住宅街であり、緑も

多く残っていた。木が鬱蒼と生い茂った大きめの公園もあったが、浄土真宗の寺がある場所柄、除草剤も使用されていなかっただろう。つまり、あそこらへんは、カッパが住むのに適している（「あの小さい人」は、もともとあの辺に住んでいたのかもしれない）。また、そこから5分ほど行けば多摩川も流れていた。彼は微笑んでいたが、散歩中だったのだろうか？

「35種の異なる人類」

名前を知って歴史を知るという方法は、新しい名前を覚える度に全貌が変わって行く。以前は、全てはフェニキア人から始まったと考えていた。しかし、その後、「フェニキア人が最初」という考えは改めて、ノア、セム、ハム、ヤペテ、更にアダムまで遡り、聖書の家族が最初であるという考えに行き着いた。しかし、「神統記」を知ると、聖書の家族が最初であるという考えは捨て、カオスなどの原初の神々が最初の人類である、彼らはホモエレクトスの部族であるという考えに改めた。

そのような試行錯誤を経て、最終的にアフリカで祀られている神々が最初の人類であるという考えに行き着いた。それも尤もな話だ。人類はアフリカで生まれたといわれているのだから。アフリカの神々の名前は人類の名前なのだ。そして、緻密なトラッキングを重ねることにより、その考えは正しいことが証明された。当初、「カオス」に前身は存在しないと考えていた。「カオス」の名が人類最初の名前であるとまで考えていた。しかし、アフリカに「クウォス」の名を見つけることで、カオスにも前身が存在することがわかった。

数多いるアフリカの神々のうち、緻密なトラッキングを経て、35種の神を我々の先祖である、オリジナル人類として設定した。エス、カゾオバ、キブウカ、サグバタ、ナナブルク、ムンビ、アブク、ムワリ、モリモ、ルハンガ、チュクウ、クウォス、ヴィディエ、ムシシ、レザ、ウェネ、オロクン、オロルン、カアング、ジェンギ、ワルムベ、イマナ、ニヤメ、エバシ、キャラ、トレ、モディモ、ディンカ、シルック、ハダメ、マサイ、ムルング、ザムビ、ンジニ、イサックである。中には神ではなく、ディンカ、シルック、マサイ、ハダメ、イサックのように、現在でもアフリカに暮らす部族の名前もある。

●河童の正体

今まで、宇宙人、ビッグフットなどのミステリアスな人類にもスポットを当て、名前をトラッキングすることで、その正体に迫ってきた。そして、今回は、河童、キジムナーなどのミステリア

スな人類の正体にもスポットを当ててみた。しかして、以下のような結果が得られた。

彼らも、我々と同じ人類である。

河童は、地方によっていろいろな名で呼ばれている。代表的なもので、カァバコ、セコ、ケシャンボ、カワランベなどの名がある。これらの名は、３５種のオリジナル人類から生まれたものだ。カァバコ（キブウカ）、セコ（サグバタ）、ケシャンボ（カゾオバ）、カワランベ（河原のムンビ）である。河童ら一族の歴史は古く、２００万年前にまで遡ることができる。彼らは、アフリカを離れて地中海・黒海～インダス流域・中央アジアの広範囲に渡り、生活していた。そして、人類の歴史が大きく動いた、およそ３０万年前に日本に渡ってきた。

九千坊という、河童の首領の伝説的なエピソードがあるが、この九千坊とはカゾオバのことである。彼らは、西海坊（サグバタ）と戦争をしたとされている。この戦闘の舞台は九州とされているが、実際には中央アジアである。九千坊は亀慈（クチャ）に住み、西海坊はアナトリア（カッパドキア）に住んでいたのだ。超古代、身長が５０ｃｍから１ｍの小人たちの戦争が中央アジアに繰り広げられていたのだ。

それにしても、人類には身長が４ｍの獣人から身長が１ｍ～５０ｃｍの河童、キジムナーと身長差がある。これらの身長差の要因、意味とは一体何だろうか？

●ビクトリア湖時代 異なる人類の故郷

森林に於ける覇を巡り、ゴリラ、チンパンジーに敗北した人類の祖は、アフリカ東海岸に住み着き、水生哺乳類として進化した。この時に「エス」が生まれた。彼らが、一番最初的人类である。人口過密により、海から陸に上がった彼らはアフリカ内陸部に向かい、ビクトリア湖に新天地を見出した。このビクトリア湖時代に、身長が１４０ｃｍだったエスから様々な大きさの人類が生まれた。身体の大小の相違は、各々が各々の獲物に特化することで生じた。各々の獲物に対する特化。これは、獲物がかぶることの廃止を意味する。これにより、人類という種がスムーズに存続することができるのだ。

河童の祖であるキブウカは、水生生活に特化し、小魚、カエル、昆虫などを獲物にしていたため、身長は５０ｃｍほどに縮んだ。キジムナーの祖であるカゾオバは、水陸両用の生活をし、キブウカよりも大き目の獲物に特化していたため、身長は１ｍほどであった。ピグミーの祖であるアブクは、水陸両用の生活をし、エスの頃と同じ獲物を獲っていたため、身長は１４０ｃｍのままであった。だが、いち早く、完全な陸上生活にスイッチしたクウォス、ムシシ、イマナ、ワルムべらは、大型哺乳類を狩ることで身長は１６０ｃｍに伸びた。

以上の話は、すべて200万年前までに起きたことだが、その後、50万年前にディンカ、シルックなどの人類がビクトリア湖に登場した。水生生活に特化していた彼らは、天敵の巨大ワニがいないビクトリア湖中心部に生活していた。そのため、彼らの頭部は小さく、水中で推進力を得るために手足が伸び、指も長く伸びた。その結果、彼らの身長は2 mを越えた。この、ディンカ、シルックがいわゆる金髪・碧眼の白人の祖である。

●獣人の正体

一方、キブウカ、カゾオバ、アブク、クウォスらと同じ時期に登場したルハンガは、身長が4 mにまで巨大化した。なぜ、彼らは通常の人類の2倍もの身長があるのだろうか？ヒントは、身体が小さく、力が弱い捕食者は存在しないことである。つまり、ルハンガ、チュクウが4 mの巨体を持ち、卓越した身体能力を誇るの、彼らが地球最強の捕食者たる所以だ。

彼らは、地球規模の必然性により、地球の王に選ばれた。その必然性とは、可能性のひとつとして巨大ワニの増加が推測される。それによってビクトリア湖の食物連鎖が破壊された。崩壊した自然のバランスを回復させるためにルハンガは生まれた。彼らは、恐竜時代以降、地球史上最強の捕食者として、ビクトリア湖の食物連鎖の頂点に君臨した。

ビクトリア湖には、現在でも6 mを越える巨大ワニが生息し、時折人を食い殺しているが、超古代、ルハンガは素手で巨大ワニを狩り、食べていた。巨大ワニは人類にとって天敵だった。だが、一方では、巨大ワニの天敵も人類だったのだ。ルハンガの子孫と考えられるオラン・ダラムは、インドシナ半島を流れる河川流域に住み、ビッグフットの仲間と思しき獣人もミシシッピ流域などに隣接する沼地などで目撃されることがある。彼らは、ワニを常食としているのだ。ルハンガの子孫、チュクウは、現ナイジェリアに住んでいた。彼らは、ワニだけでなく、ライオン、象、カバなどの天敵としても機能した。

ルハンガ、チュクウの子孫である獣人UMAたちは、一様に豊かな体毛に覆われていることが知られている。また、ビッグフットを目撃談によると、ビッグフットは3 mの跳躍を誇り、時速60 kmで走り、岩を投げ、グリズリーを素手で殺すという。イエティも、ヤクの腹部を素手で破り、角を掴んで片手で振り回し、殴り殺したヤクの血をすすっていたところを現地人に目撃されている。

豊かな体毛は、ワニに噛まれても、或いはネコ型猛獣が背中に爪を突き立てても平気のように進化した、一種の防弾チョッキだといえる。ビッグフットに襲われた人によると、ビッグフットに銃弾を浴びせても倒れなかったと報告している。そのエピソードは、彼らの豊かな体毛の役割を

如実に伝えている。

●宇宙人の正体

因みに、プーチン大統領、習国家主席、トランプ大統領は、みな、チュクウの子孫である。そして、ロウハニ大統領はルハンガの子孫である。更に、宇宙人（トバルカイン）もチュクウとルハンガの子孫である。チュクウとルハンガはギガントマキアの時代、連合して「テュポン」を生んだ。テュポンは、「神統記」に於いて、世界最強の怪物と記されている。しかし、それも無理はあるまい。地球の王であるチュクウとルハンガの連合体なのだから。

このテュポンが、アルキュオネウスと合体することでトバルカインは生まれた。テュポン＋アルキュオネウス＝テュポルキュオネ＝トバルカインとなる。その後、トバルカインはチュクウのトバルカイン、ルハンガのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、クウォスのトバルカインに分かれて活動する。更に、クウォスのトバルカインには気仙沼に住んでいたケシャンボ（カゾオバ）が加わり、スバル人が生まれている。

現在、比類なき科学力を継承しているのは、チュクウのトバルカイン、一部スバル人のみであり、他のトバルカインは人間界に帰順している。1970年代、コンタクティとして知られるクロード・ボリロンは、エロヒムを称する身長1 mの宇宙人に接触している。彼らの正体はスバル人である。また、スバル人は、家族であるキジムナーに特殊な電灯を託した。これにより、キジムナーの目撃者らは「キジムナーは指先が赤く光り、その光で夜に漁をしている」と報告している。

宇宙人（科学の種族）には、エラド（エラ人）、マハラエル（プリアール人）もいるが、彼らも獣人の血統である。エラドはエウリュトス、マハラエルはブリアレオースの子孫である。

中国神話を読み解いた結果、人類は2万年前からUFOを所持し、火星にまで飛行していたことがわかった。科学の種族が火星に行ったのは、観光や研究が目的ではない。彼らの目的は、できそこないの流刑である。宇宙人は、できそこないがリーダーになるのは人類だけだということに気づいた。原因は、人類特有の知能である。同じ人類であるできそこないは、だが、知能を駆使し、数で圧倒することを奥義とし、優れた者を退けることでリーダーにのし上がるのだ。

しかし、できそこないがリーダーになるのは正しくない。これは、非常に反自然的な事象である。知の最先端を行く宇宙人は、これを防止するために反自然的なできそこないを火星に流刑することにした。ここで、できそこないを定義する。他の集団生活をする種でも同じだが、できそこないとは、基本的にメス、子供をいじめて喜ぶような個体である。現に、チンパンジーの社会

では、このような個体は群れに無視され、追放され、野垂れ死にを遂げる。チンパンジーは、こうしてできそこないを淘汰し、正しく種を存続している。できそこないがリーダーになることがないため、チンパンジーは平和に暮らすことができている。

これが人類になると、できそこないの残虐性に拍車がかかる。言葉をしゃべる人類のできそこないは平気でウソをつき、しかも、罪悪感がない。言い訳ばかりし、ごまかし、シラをきり、泥棒し、弱者に暴力をふるい、人をだまし、陥れ、陰謀を企み、拳銃に子供を拉致し、拷問し、陵辱し、殺害した上、食べる。これが人類のできそこない、いわゆる「タナトス」である。タナトスが、人類に於ける「できそこないの淘汰」を廃止した。

火星に降り立った宇宙人は、中国神話によるところの巨山「羅ホウ山」に拠点を得た。羅ホウ山は中国にあると既定されているが、実施には火星のオリンポス山のことである。この火山は、非常に巨大で、高さが2万7000mもある。太陽系一の火山として知られている。閻魔さまは火星にいたのだ。地球の王族は、殺風景な火星の地で卑しいできそこないを裁き、強制労働に従事させた。

第一章 エスの超古代史

■最初の人類エス～人類の故郷アフリカ東海岸

森林を巡って覇を賭けた人類の祖は、しかし、体格で勝るチンパンジーやゴリラに敗北した。それを機に、人類の祖は森林を出て海に向かった。この時から人類は、水生霊長類として進化を遂げた。詳細はエレイン・モーガンの著書「人は海辺で進化した（どうぶつ社刊）」を参照していただきたいが、モーガンの説に私見を2つほど付け加えようと思う。

1つめは、鼻の穴である。他の霊長類は極端に水を嫌うが、それは鼻の穴が正面を向いているからだ。あれでは、水に入れば鼻にどんどん水が入ってくる。苦しい。しかし、この鼻の穴の問題を解決できた霊長類がいる。それが、我々人類とテングザルである。テングザルの鼻は、その名の通り長く伸びて特徴的だが、完成型は少々異なれど、あれもヒトの鼻と同じように、水が鼻に入らないように、鼻の穴を塞ぐような形で長く伸びたものである。その一方で、テングザルのオスの場合、鼻が大きければ大きいほどメスにモテるという付加価値が付いた。

2つめは頭髪である。モーガン女史は、頭髪については特に重要視していなかったが、筆者は、霊長類の子は親の身体の水毛にしがみつくと本能がある点に注目した。そこから、人類の長い頭髪は、人類が超古代に水生生活をしていた重要な証のひとつだと推察した。

人類は、成人も子供も水面に顔だけ出して生活していたと考えられる。そのため、水生生活を送っていたヒトの子は、波に流されないように親の頭髪につかまっていた。たくさんの子がつかまっていられるようにヒトの頭髪は長く伸びたのだ。それに加え、水面に顔だけ出して生活していた人類は、男か女か区別が付くように、男は頭が禿げ、更に髭が生えるようになった。

じつは、人類だけでなく、水生生活は短期間の生物進化に於いて、重要なファクターである。カマキリ（振り返る虫はカマキリだけ）、蛇、鳥類、コウモリ、象なども、水中生活によって現在の身体的特徴を得たと考えられる。浮力が骨格・筋肉の構造に影響を与え、短期間の突然変異を可能にするのだ。

■河童、キジムナー、ピグミー、アボリジニ、ビッグフットが生まれた～人類第2の故郷ビクトリア湖

超古代のタンザニアの海岸で、小型獣人UMAとして知られるオラン・ペンデクの特徴を備えた新しい人類が生まれた。言葉を話すことができた彼らには名前があった。「エス」である。エスの成立過程は時期的に言って、およそ800万年～400万年に至る400万年の間に起きたと

考えられる。その後、人口過密、或いは新天地への冒険を夢見た知性に基づく願望の充足を理由に、エスは故地であるタンザニアの海岸を去り、アフリカ内陸部に向かった。400万年前のことである。

アフリカ大陸各地をうろちょろし、新天地を見つけられずに果てたエスの死骸は、後に人類学者により「アウストラロピテクス」と命名された。中には、運良く新天地を見つけることができた者もいただろう。一番の成功者は、新天地ビクトリア湖を発見した人々だ。ビクトリア湖を発見したエスたちは、ここで再度、水生人として暮らし始めた。この湖水地方時代、およそ200万年の間に大小バラエティ豊かなオリジナル人類がエスから分離して生まれた。

この湖水地方時代に、エスの特徴を受け継いだ身長140cmのアブク、縮んだ身長50cmのキブウカと身長1mのカゾオバ、逆に大きくなった身長160cm～170cmのクウォス、ムシシ、イマナ、ワルムベ、そして巨大化した身長4mのルハンガが生まれている。この身長の大さの差異は、各々が各々の獲物に特化することで生じた。各々が各々の獲物の特化することにより、人類は獲物がかぶることを防止した。その結果、人類の多様化が起きたが、その多様化が人類という種の繁栄と存続を約束したのだ。

アブクは、エスの時代と変わらない獲物を狩っていたため身長は140cmと変わらなかったが、キブウカは、小魚や昆虫に特化したため、身長は50cmに縮み、カゾオバも、アブクよりも小さい獲物に特化したため、身長は1mに縮んだ。一方、いち早く陸上生活にスイッチしたクウォス、ムシシ、イマナ、ワルムベらは大型哺乳類を狩ることで身長は160cm～170cmに伸張した。中でも、6mの巨大ワニを常食としていたルハンガは、身長が4mに巨大化した。

猫族に比すれば、キブウカはイエネコであり、カゾオバはヤマネコであり、アブクはチーターであり、クウォス、ムシシ、イマナ、ワルムベは豹、ジャガーであり、ルハンガは虎、ライオンである。キブウカはいわゆる河童の先祖となり、カゾオバはキジムナーの先祖となる。そして、アブクはピグミーの祖であり、クウォスはアボリジニ、ムシシはパプア人、イマナ、ワルムベは古代東南アジア人の祖であり、ルハンガは獣人UMAとして知られるオラン・ダラムの祖である。文明人を自認し奢り高ぶる現代人は、同じ人類であるキブウカ、カゾオバを妖怪と呼び、ルハンガを獣人UMAなどと呼ぶ始末である。永い時間や、無知、現代文明がお互いを隔てているせいだろうか。

■阿蘇と伊勢と蝦夷～人類初の大いなる旅路

400万年前、人口過密により、エスはタンザニアの海岸を離れて内陸部に向かった。しかし、一部のエスは、逆に故地であるアフリカ大陸を離れた。彼らは、人類初のアフリカ大陸脱出を試みた。新天地を夢見て大いなる旅路に出たのだ。彼らは、ユーラシア大陸に侵入すると、東方に足を向けた。東南アジアに報告例が多い小型の獣人UMAオラン・ベンデクのような姿をしたエ

スは、インド、東南アジアに根を下ろした。この時に永住したエスは、現在、時折目撃されることがあるが、彼らを目撃した現地人は、上記のように彼らを「オラン・ペンデク」と呼んでいる。一方、一部のエスは東南アジアを抜け、古代の日本列島にまで到達した。最初の人類エスの名残りは、日本のいくつかの地名に残されている。それは 阿蘇、伊勢、蝦夷だったりする。いずれも名前の由来は「エス」である。

ビクトリア湖に入植したエスからは、大小、非常にバラエティに富んだ人類が生まれたが、古代日本に於いても、エスは独自の進化を遂げた。アフリカを出た時、エスは陸上生活にスイッチしていたが、日本に到着すると、彼らはまた水生生活に戻っていった。その後、エスは、40万年前にエバシが日本を来訪するまで水生生活を続けた。その、360万年の長きに渡り、まず、全身毛だらけのエスは日本の近海で生活する内、体毛がすっかり抜け落ちた。そして、その毛量は毛深いといわれる沖縄人男性の程度にまでなった。その後、エスは水中生活から陸上生活にスイッチすると、大型哺乳類などを狩り、食べるようになった。これにより、彼らの身長は160cm～170cmにまで伸びた。この身長の変化は、食生活の変化に起因している。こうして、彼らはどの人類にも似ていない顔を持つ人々として超古代の日本の地を続べた。

この、古代日本に棲みついたエス直系の子孫ともいべき人々は、今では巨大な母体人種モンゴロイドに飲み込まれてしまった。だが、現在も少数が沖縄人として沖縄に住んでおり、多数派は中米のマヤ、南米にかけて大勢見つけることができる。お笑いのスリムクラブの内間氏や、オレンジレンジのメンバーの一部に、古代日本の全域に暮らしていた古（いにしえ）のオリジナル人類エスの面影を見つけることができる。

筆者は常々、沖縄の人たちをTVで見るたびに「沖縄人て何かマヤ人に似ているな。何でだろう。マヤから移住してきた人たちかな？」と思っていたものだ。しかし、実際はそれどころか、40万年も前の大昔に、沖縄人（超古代の日本列島に住んでいたオリジナル人類エス）の方が超古代のマヤに移住していたのだ。

■ビクトリア湖のエスとは異なる進化を経た人々～古代日本人の祖先エス

45万年前にオリジナル人類ウェネが日本を来訪した。更に、40万年前にオリジナル人類エバシが超古代の日本を来訪した。ウェネ（アイヌ族）は、エスと混合することで縄文人の原型を形成したと考えられる。一方、エバシは東北地方に入植すると、蝦夷（えぞ）を築いたエスと連合し、蝦夷（えびす）を築いた。そういうわけで、「蝦夷」の漢字表記ひとつに、「えぞ」「えびす」など数種の別称がある（「えみし」の由来は不明である）。

その後、蝦夷はアイヌ族（ウェネ）から、とあるエピソードを伝えられた。人類初の混血人類ギガースの集団が盤古（古代中国）を発ち、未知の土地（アメリカ大陸）に旅立ったことを聞い

たのだ。これを知り、冒険心が滾った蝦夷は、自らも、故地を離れて未知の土地（アメリカ大陸）を目指す決意をする。

蝦夷は、アリューシャン列島を歩いたり、泳いだりしながら東方へ東方へと歩みを進めた。やがて蝦夷がアメリカ大陸に到達すると、彼らは初めて見る異なる人類の集団と対峙した。ギガースである。彼らは現在見られるビッグフットと同じ姿をしていたと考えられる。サーベルタイガーや大型の哺乳類を滅ぼしたこともあるが、同じ人類との争いを好まない先住者ギガースは、アメリカ大陸を蝦夷に譲り渡した。そして、アメリカ大陸で飼いならした家畜たち（牛、豚、羊、駱駝など）を率いて盤古への帰途に着いた。その後、蝦夷と、アメリカに残ったギガースが混合することにより、所謂「南北インディオ（ネイティブ・アメリカン）」が誕生した。時折メキシコで毛だらけの子供が生まれて話題になることがあるが、あれはギガースの隔世遺伝である。

蝦夷（エス、エバシ）とギガースの混合体インディオたちは、まず北アメリカ西海岸（当時の北極圏）に暮らした。この時、陸上生活をしていた彼らは水中生活にスイッチしたのだが、冷たい海水により「体毛が消滅」し、更に男性は「髭が生えない」という特徴を得た。この特徴は、南北インディオの遺伝子に刻み込まれた。今でも、南北のインディオには髭が生えない。基本的にエバシは「アパッチ族」となって北米インディアンの祖となり、エスは中米インディアンの祖となり、ギガースは中米～南米インディアンの祖となった。ひとくちにインディオというが、インディオは3つのオリジナル人類から成り立っているのだ。

彼ら自身は、何ら文明らしい文明を築くことはせず、アメリカ合衆国が成立した頃まで、40万年もの間、ずっと変わらぬ生活をしていた。しかし、メキシコ、マヤ、ペルーではよそ者が到来する度に謎めいた文明が築かれた。アステカ、マヤのピラミッドやペルーの巨石文化などは現地人インディオたちが築いたものではなく、巨石建造の種族ティカル人が築いたものである。また、凄惨な人身御供の儀式も河伯の種族や今川氏などのタナトスの種族が持ち込んだものである。インディオ自身は、戦うことを全く好まない平和的な種族である。

■最初の古代マヤ人～アースガルドのアース神族

現在の南北アメリカ・インディオの身体的特徴を得た蝦夷（えぞとえびす）は、古代マヤに移住した。この時に、ユカタン半島は「マヤ」と呼ばれるようになった。マヤの由来は沖縄の方言「猫（マヤー）」である。ユカタン半島にはジャガーがたくさんいた。そのため、ユカタン半島はエスによって「マヤ」と命名された。沖縄の方言は、単なる方言と言うよりは独自の言葉であり、エスの古代言語を今日に伝えるものだ。ここで蝦夷（えびす）はマヤに「太陽神アプチ」を生み、蝦夷（えぞ）はマヤに「創造神イシュムカネー」「創造神イシュピアコック」「女神イシュキック」「爬虫類創造の神イツァムナー」「月の女神イシュチュル」「ジャガーの神イシュバラケー」などを生んだ。一方、自殺の神イシュタムはなどは河伯の一族（タナトス）が作った神であり、もっと後世になって生まれる神である。アプチの由来はアパッチであり、イシュキックなどの「イシュ」の由来はエスである。神々の名を知ること、エスが古代マヤに住んでいた

ことが分かる次第だ。

その後、7万年前に実施された「第二次アルゴス号の大航海時代」により、現カリフォルニア周辺に「ミドガルド王国」、北メキシコ周辺に「ヴァルハラ王国」、南メキシコにヴァルキューレ（ヘラクレス）の国「ヴェラクルス」が築かれた。その時代に先住者である蝦夷（えぞ）は「アース神族」と呼ばれ、古代マヤはヴァルハラの隣国「アースガルド」と呼ばれた。アースガルドの名の由来はエスと現バンクーバー周辺に住んでいたキルーテ族（クリュティオス）の組み合わせである。エス＋キルーテ＝エスキルーテ＝エースキルテ＝アースガルドとなる。つまり、アースガルドとは、古代マヤからミドガルド（カリフォルニア）、ヴァルハラ（北メキシコ）を横断し、現バンクーバー周辺にまで至る広範な地域を統治していた国だったことが分かる。ということで、北欧神話の舞台は北欧ではなく、古代の南北アメリカだったことがわかる。カリフォルニア北部に林立するセコイアの巨木は「巨大な宇宙樹ユグドラシル」と呼ばれたが、そこからも現カリフォルニアが北欧神話の舞台だったことが分かるだろう。現在知られている北欧神話は、「最終戦争ラグナロク」の生存者が北欧に亡命した際、現地人に伝えた古代王国の歴史である。

■葦原中津国～30万年前に誕生した伊邪那岐と伊邪那美

30万年前の超古代の世界。それは、人類の歴史が大きく動いた時代である。多種多様な、異なる人類の大移動時代が次々に起きた時代である。これにより、多くの混血部族が生まれた。日本のエスは、東南アジア～オセアニアに移住し、「アシアー」を生んだ。アシアーは、東南アジアでは「アチェー族」とも呼ばれる。アシアーは、「神統記」に記されている「オケアーニス大洋の娘たち」に参加した。しかし、古代オーストラリアに死の種族タナトスが、虚言と欺瞞によって台頭すると、これを嫌悪したアシアーは、グレニコスを誘って故地である日本に帰還した。

彼らは、九州南部（島原半島～天草諸島、八代湾に至る地域）に入植し、共同で「葦原中津国」を築いた。葦原中津国の由来はアシアーと原、グレニコスと国の組み合わせである。アシアー＋原＋グレニコス＋国＝アシ原＋ニコス国＝葦原中津国となる。ただ、葦原中津国は2種類存在したということを付け加えておきたい。30万年前に実施された「オケアーニスの大移動時代」に参加し、エーゲ海に移住したアシアーはアナトリア半島を治め、グレニコスはナクソス島を治めていた。このアナトリア半島～ナクソス島を含めた領域、つまり、エーゲ海も「古事記」「日本書紀」の舞台、高天原（古代台湾）では、葦原中津国と呼ばれていたのだ。

葦原中津国を建設したアシアーとグレニコスは、同じくオケアーニス大洋の娘たちに属するエウリュノメーを迎え、沖縄諸島のひとつに位置する伊是名島（いせな）に「伊邪那岐」「伊邪那美」の二神を誕生させた。イザナギの名の由来はアシアーとグレニコスの組み合わせであり、イザナミの名の由来はアシアーとエウリュノメーの組み合わせである。アシアー＋グレニコス＝

アジアニコ＝イザナギとなり、アシアー＋エウリュノメー＝アシアノメー＝イザナミとなる。ということは、伊邪那岐と伊邪那美は、オリジナル人類エス、チュクウ、ルハンガ、ディンカ、ムシシ、ウェネ、ワルムベ、ニャメなどの血を引いていることになる。

■イスラエル王国～葦原中津国と高天原の連合王国

1万3千年前、科学の種族トバルカインが地軸を揺らして南極大陸を北上させようとしたため、ポールシフトに起因する大地殻変動が起きた。これにより、アシアーは「縄文人の大航海時代」に参加して古代モンゴルに逃亡し、その後、1万5千年前に実施された「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに移住した。アシアーは古代メソポタミア時代に「アスタルテ」を生んだ。アスタルテの名の由来はアシアーとタルタロスの組み合わせである。アシアー＋タルタロス＝アシタルタ＝アスタルテとなる。更に、そのアスタルテは、BC32世紀に実施された「ドルイド教の大航海時代」に参加し、BC32世紀に葦原中津国に帰還した。BC32世紀も人類にとって大きな動きを見せた時代であった。

葦原中津国に帰還したアシアーは、高天原（台湾）のロア族（ブリアレオース）と連合して「イスラエル王国」を建設した。イスラエルの名の由来は、エスとブリアレオースの組み合わせである。エス＋ブリアレオース＝エスリアレ＝イスラエルとなる。イスラエル国は国際的な連合国で、葦原中津国と高天原（八代湾～台湾）を中心に出羽国（竜飛岬、十和田、津軽）、武蔵国、伊勢国、瀬戸内海（生口島、大三島）、沖縄諸島、チベット、モンゴルが含まれていた。イスラエル13支族として知られている人々は、みな古代日本、古代中国の生まれである。

■エジプト王国～葦原中津国と十和田の連合王国

葦原中津国のアシアーは、高天原のロア族と共同でイスラエル王国を統治しながら、同時に津軽国に住む十和田の縄文人と連合して「エジプト王国」を築いた。エジプトの名の由来はエスとトバルカイン、ティカル（十和田）の組み合わせである。エス（葦原）＋トバルカイン＋ティカル（十和田）＝エスバティ＝エジプトとなる。つまり、BC32世紀頃の日本列島は九州から東北地方までがエジプト王国と呼ばれていた。「聖書」に記されたエジプト王国が舞台の説話は、じつは、すべて縄文時代の日本が舞台である。

■モンゴルの英雄アシル・ボグドーと陰陽師～蘆屋道満のつながり

「ヨシュアの大移動時代」に、古代ブリテン島に伝説のアーサー王が生まれた。アーサーの正体

はヨシュアである。つまり、アーサー王はエスの子孫である。更に、「ヨシュアの大移動時代」の参加者がアフリカ大陸に南下して現アンゴラに「モンゴル王国」を建てると、ブリテン島を出発したアーサー王がアフリカ大陸に進出し、モンゴル王国を訪れた。彼は、ゲシル・ボグドーの後を継ぎ「アシル・ボグドー」としてモンゴル王国の王位に就いた。アシル・ボグドーの名の由来はアシェラーフとピクトの組み合わせである。アシェラーフ+ピクト=アシェラ+ピクトー=アシル・ボグドーとなる。「ボグドー」の名は、アーサー王がコンゴにいたピグミー族（ピュグマエイ）と親交を暖めていた証である。

モンゴル神話の英雄アシル・ボグドーは、安倍清明のライバルとして知られる「蘆屋道満」とも呼ばれた。蘆屋の名の由来はアシアである。謎が多い人物、陰陽師安倍清明は平安時代の人物と考えられているが、実際にはBC30世紀の時代の現アンゴラ～コンゴに掛けて影響力を誇ったピグミー族の神官である。当時、古代スーダン流域を支配していたピグミー族の神官（オニ）が「陰陽道」を築いた。陰陽道の名の由来は「ピュグマエイ（ピグミー）のオニ（神官）」である。オニ+ピュグマエイ=オニマエイ=オンミエイ=オンミョウ（陰陽道）となる。安倍の名の由来はピグミー族（ピュグマエイ）の先祖アブクである。アブク=アベク=安倍となる。古代ナイジェリアでは、神官をオニと呼んだが、ピグミーの神官である安倍清明が駆使した鬼とはアフリカ人の神官のことである。つまり、安倍清明はアフリカ人の神官を統率する首領だったと考えて良い。しかし、安倍清明（ピグミー族の神官）は、アテナイ王国から侵入していた司神タナトスの手に落ち、支配下に置かれた。そして、タナトスの指示ではあったが、安倍清明は陰陽道をアフリカ人民を支配するために用いた。そのため、これに異を唱えた蘆屋道満（アーサー王）は必然的に安倍清明（タナトス）と対立した。

全ての話は、9世紀頃にアフリカに住んでいたツチ族（タナトス）が14世紀頃、日本に来た時に伝えたものである。ツチ族は「ツチの帝王」を意味する「土御門家（つちみかど）」を称した。土御門家は、陰陽師としての自分の格を上げるために蘆屋道満や安倍清明の話を利用した。上記はすべて筆者の推測であるが、この推測が正しいことを証明するように、土御門家は自分たちが安倍清明の子孫であると称した。

■真の日本人～現在でも獣人UMAオラン・ペンデクの姿のまま生きているエス

最初のオリジナル人類エスは、小型獣人UMAオラン・ペンデクの姿のまま、現在でもマレーシアに暮らしている。だが、彼らはマレーシア以外の地域でも生きているようだ。1960年には、人類の故郷タンザニアで、現地人に「アゴグウエ」と命名された小型の獣人が目撃されている。身体は体毛に覆われ、身長は1.5mほどというから、見かけはオラン・ペンデクとほぼ同じだ。この獣人アゴグウエは、間違いなく、400万年前に湖水地方にも日本にも辿り着けなかった、故地タンザニアに取り残されたオリジナル人類エスの子孫だ。アゴグウエは、オラン・ペンデクと共にすべての人類の祖であり、古（いにしえ）のオリジナル人類エスの姿を現代に留め

た「神代の時代」の人々である。

また、マレーシアの隣国インドネシアには「エブ・ゴゴ」と呼ばれる小型の獣人が昔から現地人に目撃されている。エブ・ゴゴはオラン・ペンデクと同じ種族だと考えられる。体毛に覆われ、身長も1.5 mということで、アゴグウエとも同じ体型をしていることがわかる。日本のヒバゴンも身長が1.5 m～1.7 mと、オラン・ペンデクたちと同じ背格好である。もし「ヒバゴン騒動」が村興し目的のフェイクニュースではないとしたら、日本の獣人ヒバゴンもオリジナル人類エスの子孫ということが出来るかもしれない。その場合、未確認生物ヒバゴンは真の日本人ということになるのかもしれない。

第二章 カゾオバの超古代史

■超古代北極圏に生まれたキジムナー～最古のヨーロッパ人

100万年前、湖水地方に棲んでいた小人族が「第1次キブウカの大移動時代（西方組）」を実施した。身長が50cm～1mの小型人類の集団がオリジナル人類エスに引き続き、古代アフリカ大陸を脱出し、新天地を求め、故郷を離れて大いなる旅に出た。彼らは陸上を徒歩で移動するのではなく、ナイル河を下って行ったと考えられる。彼らは、ペンギンのように水中ではすばしこかったため、易々とワニの餌食になることはなかった。

身長が1mのカゾオバは、ムンビ、キブウカと共に古代エーゲ海に棲みついた。この時に、湖水地方時代と同じように水生生活を継続し、昔ながらの獲物を狩っていたムンビとカゾオバは身長が1mのままだった。だが、新天地では湖水時代のように各々の獲物に特化する必然性は不要だった。そのため、一部のムンビとカゾオバは陸上生活にスイッチし、思い思いの獲物、特に大型草食動物を狩り始めた。栄養価が高い獣の肉を食べ始めた彼らは、身長が160cm～170cmに伸びた。彼らはバルカン半島に棲む白人の祖先である。つまり、古代エーゲ海には、小人と現バルカン人（主にギリシア人）の姿をした人々が共存して生きていた。

目撃談によると、キジムナーは胴が短く、手足が長いとされているが、巨大化したキジムナーの子孫と考えられる地中海の白人は確かに似た体型をしている。一般的には、白人の胴が短いのは肉食だからだとされているが、キジムナーの目撃談によると、彼らは赤い髪を持ち、肌は白いとされているが、キジムナーの赤い髪はエーゲ海の時代に獲得したと考えられる。

当時、褐色の肌を持っていたバルカン人の祖先は、北極圏に近いエーゲ海に住むことで、碧眼・茶髪の白人と化した。その一方、小さい体を維持していた一部のカゾオバとムンビの髪は赤くなり、肌は白くなった。現在、沖縄でしか目撃報告がない妖怪キジムナーは、遥か古代、エーゲ海に暮らしていた小人族だったのだ。妖怪として知られるキジムナーは、古代のエーゲ海でカゾオバとムンビが合体することで生まれた種族だ。名前の由来はカゾオバとムンビの組み合わせである。カゾオバ+ムンビ=カゾムン=カゾムヌ=キジムナーとなる。

■伝説の河童の首領九千坊～オリエントで起きた超古代戦争

100万年前、湖水地方に棲んでいた小人族が「第1次キブウカの大移動時代（東方組）」を実施した。この、身長が50cm～1mの小型人類の集団は、インダス流域、パンジャブ、インド全土からコラサン地方、中央アジア、タリム盆地に至る広範囲にかけて棲みついた。西方組と同様、東方組に於いても、湖水地方時代と同じように水生生活を継続し、昔ながらの獲物を狩る人々と、陸上生活にスイッチし、大型草食動物を狩る人々に生活圏が分かれた。栄養価が高い

獣の肉を食べ始めた一部のカゾオバらは、身長が160cm～170cmに伸びた。彼らはインド人の祖となった。東方組の人々の肌は褐色のままであったが、地中海人と同様、やはり胴は短く、手足は長いままだった。

近年、アラル海は水量が減少し消滅しつつある。だが、じつはタリム盆地も超古代の時代、巨大な湿地帯だった可能性がある。この湿地帯は「亀慈（クチャ）」と呼ばれた。亀慈（クチャ）の名の由来はカゾオバである。カゾオバ＝カジョオバ＝カジョ＝クチャ（亀慈）となる。超古代の亀慈を統治した王として「九千坊（くせんぼ）」の名が日本に伝わっている。九千坊は河童の首領として九州を統治していたとされているが、名前をトラッキングした結果、九千坊の正体はオリジナル人類カゾオバであり、身長が1mしかないながら、九州ではなく亀慈を中心に湿地帯だった古代のタリム盆地全土を統治していたと考えられる。九千坊（くせんぼ）の名の由来はカゾオバである。カゾオバ＝カゾンバ＝くせんぼ（九千坊）となる。

河童の歴史によると、この伝説的な河童の首領九千坊は、西海坊（さいかいぼ）という別の河童の首領と戦争をしたとされている。舞台はやはり九州とされているが、名前をトラッキングした結果、実際にはカッパドキアに棲む西海坊が亀慈を治めていた九千坊と戦ったと考えられる。名前をトラッキングすると、西海坊はオリジナル人類サグバタの分身ソグボであり、彼らはカッパドキアを拠点にアナトリア全土を治めていたと考えられる。ソグボ＝ソイグイボ＝さいかいぼ（西海坊）となる。つまり、アナトリアとタリム盆地に棲む小人族が、中央アジアという広大な土地を舞台に超古代の時代、大規模な戦争を繰り広げていたのだ。およそ、100万年前のことである。

■気仙沼の河童が宇宙人の一族に加わる～クロード・ボリロンの前でエロヒムを名乗ったスバル人

30万年前は人類の歴史が大きく動いた時代であるが、この時に小人族の人々はオリエント地方から日本への移住を開始した。小人族たちが故地を捨てて新天地を求めた要因としては、大型草食動物を食べて1mから170cmに巨大化した同族との間に不和が生じたためではないかと考えられる。身長が50cmのままのオリジナル人類キブウカは、パンジャブから古代日本に移り、「カアバコ」と呼ばれた。カアバコとは「遠野物語」で知られる岩手の地域で使われている河童の呼称だが、これが河童の語源だと考えられる。

一方、オリジナル人類カゾオバはムンビと共にキジムナーとして沖縄や宮古島に居を得た。長い年月を通して同じ生活を続けている彼らは現代人に妖怪と呼ばれ、時には畏怖され、時には親しまれている。近代になるまでは現代人と彼らの交流は当たり前だったようだ。一方、キブウカに同行して気仙沼に棲みついたカゾオバの一族がいた。彼らは「ケシャンボ」を称した。ケシャンボの由来は九千坊（くせんぼ）である。ケシャンボは、河童の別称、或いは同類として知られているが、彼らが「気仙沼」を築いた。気仙沼の由来は「ケシャンボの沼」である。ケシャンボ+

沼＝ケシャン沼＝気仙沼となる。超古代の気仙沼には、身長が1 mの小人族が生活していたのだ。

約2万年前の東北地方、出羽山脈の一帯には宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）が住み着いた。最終戦争ラグナロクによって放射能に汚染された故地（古代マヤ）を捨て、チュクウのトバルカイン（マヤでは創造主テペウ）たちが出羽国を建設したのだ。当時の出羽国では津軽、竜飛岬、十和田などの地域も独自の力を持っていた。津軽にはピラミッド建造の種族ティカル人が住んでいた。そして竜飛岬には核兵器で滅んだタップ・オノス（スコットランド北部）から移住してきた宇宙人（オロクンのトバルカイン）が居住していた。十和田は、宇宙人（チュクウのトバルカイン）と巨石建造の種族ティカル人が共同で統治した。両者は十和田湖に巨大なピラミッドを実験的に築き、黒又山なども建造していた。

気仙沼の河童たちも、縄文人たちに混じって宇宙人とティカル人がピラミッドを建造する様子を目撃していたはずだ。この時、気仙沼のカゾオバは宇宙人の科学に興味を示し、十和田の宇宙人（チュクウのトバルカイン）に、科学の最先端を追求する種族が住む初代ターバイ王国に行きたい旨を申し出た。すると、竜飛岬の宇宙人（オロクンのトバルカイン）が、彼らを宇宙人（ルハンガのトバルカイン）がサハラに築いた初代ターバイ王国までUFOで送ることになった。サハラに到着したカゾオバは宇宙人（ルハンガのトバルカイン）と連合した。そのときにスバル人が生まれた。スバルの名の由来はカゾオバとトバルカインである。カゾオバ＋トバルカイン＝ゾオバル＝スバルとなる。スバルはサハラの語源でもある。

初代ターバイ王国で最先端の科学を身につけ、宇宙人（ルハンガのトバルカイン）と共同で研究に勤しんだスバル人は、だが、混血を控えた彼らの身長は1 mのままだった。著名なコンタクティーであり、フランスに宇宙人を崇拝する新宗教まで立ち上げたクロード・ボリロンは、1973年にフランス、クレルモン・フェラン山中で「エロヒム」を自称する宇宙人に遭遇した。ボリロンは、身長が1 mしかない小さい宇宙人に出会ったことで人生が一変した。マイトレーヤ・ラエルを名乗った彼は新宗教「ラエリアン・ムーヴメント」を創設し、世界中に支部を持つに至る。その小さい宇宙人の正体はスバル人である。

そんな小さい宇宙人であるスバル人は、同族である沖縄に住むキジムナーに昔からちょくちょく接触しているようだ。彼らは、200万年前と変わらない生活を送るキジムナーに、生活の足しにと、いろいろと最先端の科学でこしらえた「道具」を与えているようだ。キジムナーの目撃者によるとキジムナーは突然現れたり消えたりすることがあるというが、テレポート技術を用いているのだろう。妖怪呼ばわりの大元はこのへんにあるのかもしれない。いつから使用し、また、どのような器具を用いているのか全く不明ながら、宇宙人自身、テレポートが可能なのでスバル人と交流をしているキジムナーがテレポートできるのは不思議なことではない。また、夜間にはキジムナーは指先が赤く光り、その明かりで漁をしていると報告されている。この場合も、スバル人はキジムナーに何らかの特殊な電灯器具を贈ったのではないかと考えられる。

■カシミールの歴史～アクスム王国と鹿島神社

30万年前、小人族カゾオバは、獣人族チュクウ、クウォスと共に「ステュクス」を生んだ。ステュクスは「神統記」に於いて、冥府の川と記されている。カゾオバ+チュクウ+クウォス=ゾチュクウォス=ステュクスとなる。ステュクスは古代の東南アジアに生まれたが、彼らはインドネシアに住んでいたトゥングル族、パプアニューギニアに住んでいたムユ族を連れて北上した。ステュクスとトゥングル族は、台湾にそれぞれセデック族とケタガラン族、クーロン族を残している。この3者は、台湾の先住民族として知られているが、彼らは30万年前に生まれた、非常に古いタイプの混血人類である。

その後、更に北上した彼らは現黒龍江近辺に居を構えた。ステュクスは「チュクチ族」を生み、トゥングル族は「犬戒（キロン）」を生んだ。一方、カゾオバが主導するステュクスは、ムユ族を伴ってインド方面に居を据えた。彼らはここに「カシミール」を築いた。カシミールの名の由来はカゾオバとムワリ（ムユ族）の組み合わせである。カゾオバ+ムワリ=カゾムワリ=カソムワリ=カシミールとなる。

時代は下り、ステュクス（チュクチ族）は紀元前に「沃祖（オクジョ）」として活動し、朝鮮半島北部に拠点を得ている。沃祖の活動の詳細は不明だが、名前をトラッキングすると、朝鮮半島北部にいた沃祖はAD1世紀頃にはアラビア半島に移っていたことがわかる。「アクスム王国」である。アクスムの名の由来はオクジョとカシミールの組み合わせである。オクジョ+カシミール=オクジョミ=オクショミ=アクスムとなる。

アクスム王国自体も活動の詳細はよく知られていない。アクスム人の情報は、製鉄産業と小型ピラミッドの建設で知られるメロエ王国を滅ぼし、コプト教に改宗してアフリカ初のキリスト教国となったくらいである。しかし、名前をトラッキングすると、彼らは今度はマヤ、ペルーに出現していることがわかる。マヤには「コスメル」の名を残し、ペルーには「カスマ」の名を残している。コスメルの由来はカシミールであり、カスマの由来はアクスムである。カシミール=カシミル=コスメルとなり、アクスム=アカスマ=カスマとなる。彼らがどういう理由で、紅海から中南米にまでやってきたのかは不明だが、新天地を求めて遠くまで船出したのは間違いない。

その後、AD8世紀頃に「鹿島神社の大航海時代」が始まる。この航海は、ペルーを離れたペルー人が日本を目指したもののだが、知久氏（チコマ川）、望月氏（モチエ川）、三木氏（アプリマック川）、木曾氏（コサ川）、根津氏（軍事国家カワチ）、阿比留氏（アプリマック川）、有馬氏（ワルメイ川）、毛利氏（ワリ帝国）などの有名氏族が生まれている。中でも知久氏、三木氏、望月氏、木曾氏、根津氏が信濃国に入植した。この時に、信濃を流れる河川が、ペルーのチコマ川に因んで「千曲川」と命名された。

アクスム人たちはまず房総半島に上陸したが、その上陸地点に「鹿島神社」を建設した。鹿島の由来はアクスムである。「鹿島神社の大航海時代」の一行は、房総半島から信濃国、或いは九州に散って行った。アクスム人の子孫は、信濃国では「木曾氏」を称したが、日本中に拡散した彼

らは更に、鹿島氏、鹿嶋氏、加島氏、児島氏、小嶋氏、小島氏、笠間氏、風間氏、草間氏、久住氏などの名前を生んだ。

■光神ルグスの遺伝子～創造神ケツアルコアトルからハザール帝国まで

約一万年前、大地殻変動の時代が収束した頃、多くのオリジナル人類の子孫はメソポタミアに集っていた。スバル人もメソポタミアに棲み、シュメールの都市国家として知られる「シッパール」を築いた。シッパールの名の由来はスバルである。スバル＝スッパール＝シッパールとなる。一方、中央アジアで草食動物を狩り、食べていたために身体が巨大化したオリジナル人類カゾオバは身長が170cmほどになり、メラネシア人（ソロモン諸島など）のような姿かたちをしていた。

彼らは、小人族であるスバル人と家族であるため、スバル人の元に身を寄せ、共存する形で古代メソポタミアに住んでいた。だが、北アフリカとスカンジナビアへの移住を目指した「アヌンナキの大移動時代」が始まると、カゾオバはこれに参加し、メソポタミアから北アフリカに移住した。この北アフリカ時代、カゾオバは「クシュ」を称した。クシュの由来はカゾオバである。カゾオバ＝カジョオバ＝カショ＝クシュとなる。クシュはハムの子として知られている。

BC5千年に「セネガル人の大航海時代」が実施されると、クシュ人もこれに参加し、古代アイルランドに移住した。この時にクシュ人はフォモール人と連合し「光神ルー（ルグス）」を生んだ。フォモール＋クシュ＝ルクシュ＝ルクス（ルー）となる。当初、光神ルーはアイルランドの神々の一員として古代アイルランドを統治していたが、ダーナ神族（タナトス）が到来すると、彼らのウソと欺瞞によって邪教の信者にまで堕ちてしまった。残念なことに、彼らは「マー・トゥーレスの戦い」にダーナ神族側として参加した。この戦争は、オロクンのトバルカインが、ダーナ神族の侵入を阻止するためにタップ・オノスに築いた基地を核兵器で破壊したことで終焉を告げた。

タップ・オノスの破壊を機に、アイルランドの神々は、アイルランドを離れてアフリカやメソポタミアに帰還した。光神ルーは先祖の故地であるメソポタミアに腰を落ち着けると、シュメール人の都市国家として知られる「ラガシュ」を築いた。ラガシュの名の由来は光神ルーの別名ルグスである。その後、BC32世紀頃にソドムとゴモラが発生すると、ラガシュの人々は「シュメール人の大航海時代」に参加し、メソポタミアから少し離れた現グジャラートに入植した。グジャラートの名は、シュメール人によってこの時に命名された。グジャラートの由来はラガシュとエリドゥの組み合わせである。ラガシュ＋エリドゥ＝ガシュリドゥ＝ガシュリードゥ＝グジャラートとなる。

更に、BC10世紀にはグジャラートからガンジス流域に移住した人々が「コーサラ」を築いた。コーサラの由来はグジャラートである。グジャラート＝グージャラート＝クーシャラ＝コーサラとなる。そして、BC317年にマウリア朝が成立すると、コーサラ王家はインドを脱出して

朝鮮半島に移住した。インド人の顔をした彼らは朝鮮人と混合して「箕子（キジャ）」を称した。箕子の名の由来はグジャラートである。グジャラート＝キジャラート＝キジャ（箕子）となる。

この箕子の人々は、BC 4 世紀に実施された「ヒットライト人の大航海時代」に参加してスコットランド北部（ピクトランド）に入植し、ピクト人の部族として知られる「ケ」を生むが、更にケの人々は、同じピクト人の部族であるフォトラと共にBC 3 世紀の「第2次ヴィシュヌの大航海時代」に参加し、古代メキシコに移り「ケツアルコアトル」を生んでいる。ケツアルコアトルの名の由来はコーサラとフォトラの組み合わせである。コーサラ＋クオトラ（フォトラ）＝コサラクオトラ＝ケツアルコアトルとなる（フォトラはハ行がカ行を兼ねる法則でクオトラになる）。

これ以後も航海の旅は続くのだが、BC 139 年の「ケツアルコアトルの大航海時代」の時、ケツアルコアトルの神族は2つに分離した。メキシコを離れて中央アジアに入植した人々は「カザール人（カ行がハ行を兼ねる法則でハザール人とも呼ばれる）」となり、ペルーに入植した人々は「ケチュア族」となった。ケツアルコアトル＝ケツアール＝カザールとなり、ケツアルコアトル＝ケツア＝ケチュアとなる。情報が乏しく謎の多い「ハザール帝国」は、じつは遠い異邦の地メキシコから来たケツアルコアトルの神族が建てた帝国だった。ハザール帝国は、史上初めてユダヤ教を国教に据えた国ということで知られているが、ユダヤ教を持ち込んだのは、シベリアから来たタナトス系シベリア人と宇宙人（トバルカイン）の混血である。が、その関連の話は、別著「異種の人類タナトスの歴史」などを参照していただきたい。

キブウカの歴史

第三章 キブウカの超古代史

■エーゲ海を治めた河童～最古のギリシア人

身長が50cmしかないオリジナル人類キブウカ。彼らは、じつは「河童」の先祖である。古代のビクトリア湖に誕生した彼らは、水中生活に特化した暮らしを送っていたが、知性ゆえの湧き上がる冒険心を抑えることができなかったのか。およそ100万年前、ビクトリア湖の小人族が一同に介し「キブウカの大移動時代（西方組）」を敢行した。オリジナル人類エスの東方行きに次ぐ、人類史上第二となる母なるアフリカ脱出の旅である。小さい昆虫や川の中の小動物を獲物に特化していた彼らは、ペンギンのように全身を使って空を飛ぶように水中を泳ぎ、獲物を追跡していたと考えられる。ということで、キブウカらはペンギン同様に陸上を歩くことが不慣れだったため、陸上を徒歩で移動するのではなく、ビクトリア湖を出発してナイル河を下ることで北上したと考えられる。

ペンギンのように縦横無尽に、しかもすばしっこく泳ぐ彼らはクロコダイルの餌食になることもなく、大勢が人類初の新天地、地中海に到達した。キブウカは現エーゲ海に棲みついた。「エーゲ」の名に彼らの名残りが残されている。エーゲの由来はキブウカである。キブウカ＝キブウ＝ガ＝ウ＝ガ＝エーゲとなる。キブウカは、古代ギリシア～アナトリア半島沿岸に至る地域を生活圏とした。エーゲ海に順応した彼らは海生小動物や魚介類を狩って暮らした。だが、新天地ではビクトリア湖時代のように各々の獲物に特化する必要性がなくなったため、中には陸上生活にスイッチし、哺乳類を狩り、栄養価の高い食事を採ることで身体が50cmから160～170cmに巨大化したキブウカもいた。更に当時、北極圏に近かったエーゲ海に棲むことで、小人のキブウカや巨大化したキブウカは茶髪、碧眼・茶眼の白人と化した。巨大化したキブウカが、現ギリシア人、バルカン人や現トルコ人の祖先となる。

下記に後述しているが、東方組のキブウカは古代インドでスパイス文化を花開かせた。しかし、西方組のキブウカも古代地中海で様々なスパイスを発見し、活用していたようだ。地中海では、インドのアーユルヴェーダのように体系化されることはなかったが、彼らはディル、セロリ、マスタード、キャラウェイ、コリアンダー、サフラン、フェンネル、ジュニパー、ポピー、アニス、胡麻などを発見した。30万年前に「第2次キブウカの大移動時代」が起きた際、インドに移住した地中海の小人族は上記のスパイスを持参していたと考えられる。

■カブールを築いた河童～インド人の正体

一方、同じ時期に「キブウカの大移動時代（東方組）」が実施された。東方組はナイルから地中

海に出ると、地中海を基点に東方に歩み（泳ぎ）を進めた。オリジナル人類キブウカは同じくオリジナル人類であるナナブルクと共にインダス流域を根城に定め、上流に「カブール」を設けた。カブールの名の由来はキブウカとナナブルクの組み合わせである。キブウカ＋ナナブルク＝キブウル＝カブールとなる。日本以前に、河童はインダス流域に棲んでいたのだ。当時、パンジャブ一帯は現在よりも南に位置し、赤道に近かったため、キブウカの褐色の肌、黒髪、黒い瞳が変化することはなかった。

だが、やはり古代カブールでも、昔ながらの生活を捨て、思い思いの獲物を獲り、栄養価の高い食事を取ることで巨大化したキブウカラがいた。彼らはインド人の先祖となる。顔に於いては、インド西部、南部に住むインド人がキブウカの面影を色濃く残していると考えられる。数十万年前に陸上生活にスイッチしたインド人は、水中を矢のように飛ぶキブウカの特長は喪失したものの、顔は小さめで鼻は尖り、眼は大きく、口は尖っている感じだが、実際の河童はインド人の顔を小型化したようなものだと考えられる。筆者が多摩ニュータウンで目撃した河童の顔もまさにそんな感じで、「小さいインド人」という印象を受けた。

■河童の文明～アーユルヴェーダ、ヨガ、カーマーストラ

亀慈を統治していたオリジナル人類カゾオバの場合と同じように、インドでも小人のまま生きているキブウカー族と、巨大化したキブウカー族の間に不和が生じたようだ。ということで人類の歴史が大きく動いた30万年前、カブールの小人族を中心にした「第2次キブウカの大移動時代」が実施された。大きいインド人との不和から小人族キブウカは故地を離れる決心をし、東アジアにまで足を伸ばし、古代日本を選び、日本全土に入植したのだ。この時に一般的に知られている「河童（カアバコ）」が誕生した。河童が日本上陸を果たした瞬間である。カアバコの名の由来はキブウカである。キブウカ＝キブウカ＝キブカ＝カアバコとなる。

妖怪の河童は、頭に皿、背中に甲羅を背負っているなどの姿で描かれることが多い。だが、これらは身体的特徴ではなく、民族衣装のようなものだったのではないか。だいたい、民俗学分野で集められた河童の報告を見るとそのような姿をしている河童はほぼ皆無だ。ほとんどが裸の幼児に似ていると報告されている。肌の色も白から灰色、桃色、褐色などさまざま。河童が頭に皿を乗せている場合、その皿と思しきモノは、じつは昔の日本人や東南アジア人の農民がかぶる笠のようなものと同じではないかと考えられる。それどころか、人間がかぶっていた笠は河童由来なのかもしれない。河童が使っていたものを継承しているわけだ。甲羅の場合、スッポン（体長31cm）が死んで残した甲羅を、河童が拝借して着れるように加工し（人類だから加工は可能だろう）、鎧の如く活用していたのかもしれない。

一方、インドに残ったインド人たちはアーユルヴェーダ、ヨガ、カーマーストラ、スパイス文化など、人類広しといえど、他に類を見ない完全なオリジナルと受けとれる文化を形成した。アーユルヴェーダなどは正に、異種の人類による産物と呼ぶに相応しい。アーユルヴェーダ、ヨガ、カーマーストラ、スパイス文化は、河童たちの文明の産物なのだ。

興味深いことに江戸時代の報告には、河童の男性が普通の日本人女性と交わる記述が良く見られる。日本人女性は、鼻が高く、目の大きい、身体が小さい河童を見てかわいいと思うのだろう。話によっては、夜中になると女性の方から河原に赴き、河童に会いに行っているほどだ。別の話では、河童は家人が寝ている間に家屋に侵入し、女性と行為に及んでいる。そういえば、インド人にはいわゆるイケメンも多い。河童を愛した女性にとっては、河童は「イケメンの小人」だったのかもしれない。

身長50cmという記録でギネスに載った、現代の河童と呼ぶべき世界一小さい俳優ネルソン・デ・ラ・ロッサ（既に故人）も普通の身長的女性と結婚し、一児を儲けている。もちろん、その子は2、3歳くらいであつという間に父であるネルソンの身長を追い抜いた。とにかく「種」の特徴として、身長の相違を苦にしない河童は性に対して非常に挑戦的、且つ好奇心に溢れた人々だといえる。また、性に関して他の人類に比し、多角的な視点に基づく大らかな感性を持っていたようだ。そのため、河童の子孫であるインド人は、カーマストラなど、子孫を残す手段であるはずの性交を、技術・遊戯にまで高め様式化することができたのかもしれない。異種の人類だからこそ、そのような発想を得ることができたのだ。

スパイス料理はアーユルヴェーダの一環でもあり、ヨガとも結びついているが、世界の食文化に対して多大な恩恵を与えている有益な発見のひとつである。彼らがスパイスを発見した直接的な要因として、小さい彼らが昆虫や小さい生物を狩る一方で、木の実、葉、種子などを採集し食べていた可能性が挙げられる。インド周辺に棲んでいたオリジナル人類キブウカは、永い年月を掛け、生息圏全土に育つ全ての木の実、葉、種子を食べ尽くした結果、現在知られているインド～東南アジア産スパイスを揃えることができた。カシア、シナモン、クミン、ターメリック、ゼドアリー、レモングラス、カルダモン、クローブ、ハッカク、ガランガル、ナツメグ、胡椒、チュバブ、タマリンド、アジョワン、フェネグリーク、生姜などのスパイスは河童が発見したのだ。小人族は、スパイスの効能を知り尽くしていたが、白人列強の大航海時代で白人が訪れると、スパイスとその知識はヨーロッパにもたらされ、近代になるまで薬、虫除けとして重宝された。

■アイヌ族と交易した岩手県の河童～コロボックル

河童とは印象が異なるが、河童以外の小人族が他にも日本に存在していた。ふきの下に5、6人で住んでいるという北海道のコロボックルである。オリジナル人類ウエネの子孫であるアイヌ族の伝説によると、「コロボックル」はどこからか、船舶を用いて北海道に渡ってきたという。ということで、コロボックルは船を建造する知識を持っていたようだ。コロボックルの北海道来訪の目的は交易だったという。コロボックルの研究者は、コロボックルがアイヌと交易をしていた際、「彼らは大鷲が住む土地から来ていた。つまり、千島列島の住人だった」と推理したが、筆者は、彼らが岩手県から来ていたと考えている。岩手県にも大鷲は住んでいるからだ。だいたい千島列島には小人の話は聞かない。しかし、日本には河童という小人がいる。

名前をトラッキングした結果、コロボックルの正体は、現岩手県岩泉の河童一族であるという結論に達した。コロボックルの名の由来は「カアパコル（河童の人）」ではないかと考えられる。カアパコル＝カラパコル＝コロボックルとなる。彼らは、つい数百年前まで現岩手県を出発し、大海（河童にとって）を渡ってアイヌ族と交易を行っていたのだ。コロボックルは、主に土鍋製作用の粘土を採取に北海道まで来ていたという。ということは、河童の一族は土器時代にまで達していたのだろうか？その後、一部のコロボックルは北海道に入植し、アイヌ族と共存していたようだ。だが、伝説によると、コロボックルの女性がアイヌ族の男に捕まえられて辱めを受けたため、コロボックルたちは「トカップチ（腐れ！）」という呪いの言葉を残し、部族ごと北海道を去ったという。

その後のコロボックルがどうなったかは定かではない。だが、もし筆者の推測通りにコロボックルの正体が岩手から来ていた河童なら、北海道を後にした河童は故地である岩手に帰還したのだろう。何も、「遠野物語」で知られる岩手だけでなく、河童の目撃は全国に及んでいるわけが、民俗学の分野から目撃談を集めた本も何冊か出ている。特に興味深いのが「河童を見た人々」「河童・天狗・神隠し」という本である。下記に「河童を見た人々」の一部を紹介したいと思う。

■河童の特徴（高橋貞子著「河童を見た人々」より）

下記の河童の目撃報告は、大正当時岩泉に在住していた故小野寺末次郎氏によるものである。

- 1：人間ならば二歳ぐらいの子供の背丈をしている。
- 2：頭に皿を被っていなかった。髪は束ねた格好で顔にばさっとかかっていた。
- 3：体の色は背中の方が茶色だが馬のトチクリ毛色だ。栗の実の皮の色に例えてもいい。腹は白い。白でも青みがかっていてアオダイショウの腹の白色と同じだ。
- 4：白い腹には花ササゲの実のような斑点が三個ずつ両側に並んでいた。（筆者推測：河童の女性には犬猫のように乳首が3対あったのかもしれない）
- 5：顔は丸いがまん丸ではない。人間の顔に良く似ていた。
- 6：目玉の瞳は黒い。目玉の白い部分は人間より黄がかった。
- 7：手は二本、足も二本あった。手には五本の指があったが爪が鋭い。鷲や鷹の爪というよりはガラ針のようだった。指と指の間には水かきがあった。足にも五本の指があったが爪も水かきもなかった。
- 8：耳は垂れ下がっていてピンと立っていなかった。

大正時代、小野寺氏が地元の河川、鼠入川に釣りに出かけると、平たい岩の上で河童が踊っていたのを目撃したという。たっぷり二時間は観察したということだ。河童は踊り続けていたそうだが、その時にしっかりと河童の身体の特徴を捉えたという。それが上記で述べられている特徴の数々だ。これが第一次接近遭遇だったらしいが、小野寺氏は全部で四回は河童を目撃したとし

ている。第三次接近遭遇の時は、この時も鼠入川だったそうだが、河童は岩の上で身体を干していたという。岩には水に濡れた河童の足跡があったが人間の子供の足跡と間違えるほど似ていたそう。下記に、大正時代に道を歩いている河童を見た人の目撃談を紹介したい。

”子供の頃、萩刈りに行く母と一緒にでした。小雨がしとしと降る日でした。萩刈り山は遠くにあったので母親と手をつないで川沿いの道を歩いていました。ふと気がつくと前方を身体の高い裸わらしが歩いていました。子供心に「どこのわらしだべえ」と思っていると母親は屈みこんで足跡を調べ、「カアパだよ」と言いました。河童は前方をちょちょこと跳ねるような足取りで歩いていました。頭に皿を被った背丈二尺（約60cm）ほどの河童でした。母親と二人、息を潜めて河童の足跡を辿りますと足跡は川まで続いていました。”

この目撃談の河童は、筆者が多摩ニュータウンで目撃した河童と非常に酷似している（筆者が見た河童は皿は被っていなかったが）。自分のこの眼で見た者としては、この目撃談は非常に信憑性があるといわざるを得ない。また、小雨が降る日に目撃されたこの河童は頭に皿を被っていたようだが、河童の頭の皿は、やはり筆者の推測通りに笠なのではないか？いつか河童に会うことがあったら本当のところを聞いてみたいものだ。

■河童の大航海時代～吉備氏からカペー朝まで

一方、インド人の姿をし、カブールに暮らしていた巨大化したキブウカは、BC30世紀に実施された「ヨシュアの大移動時代」がカブールを訪れたのを機に参加し、故地であるインドを離れて古代エジプトに入植した。この時に、彼らは、フンコロガシの頭をした太陽神ラーのAvatarのひとつとして知られている「ケペリ」を生んだ。ケペリの由来はカブールである。カブール＝カブル＝ケプリとなる。

その後、エジプトに古代王国時代が訪れると、エジプトに住んでいたカブール人はマダガスカル島に移住した。彼らは「サカラバ族」を称した。サカラバの由来はスカラベ（フンコロガシのエジプト名）である。古代台湾に高天原を築き、多くの天津神を生んだオリジナル人類ニャメは、アウトリガーカヌーを開発し、およそ10万年前から東南アジアからアフリカを自在に往来していた。マダガスカル島は、東南アジアとアフリカを結ぶ中継地点として古来から機能していた。そして多くの台湾先住民族がマダガスカルに暮らしていたが、エジプトから来たサカラバ族が、バラバラに暮らしていた彼らを初めて統率し、国民として治めたと考えられる。

BC7世紀、サカラバ族はマダガスカル島を離れたのか、中央アジアに出現している。マダガスカルを離れた理由は定かではないが、サカラバ族は中央アジアでは「スクラブ族」と呼ばれた。スクラブ族は、アント族、ウェネト族と共にスラブ民族の祖と呼ばれている。スクラブの由来はサカラバである。更に時代が下ると、モンゴルで勇猛な騎馬民族として鳴らした鮮卑などの民族がシルクロードを往来し、ゲルマン人大移動夜明け前のヨーロッパにも顔を出していた。

BC133年、中央アジアで騎馬民族と交流することにより、東方に関心を持ったスクラブ族は、カッパドキア人と共に中央アジアを離れ、「カッパドキア人の大航海時代」を組んで東アジアに向かった。一行は日本に上陸し、現岡山県に入植した。吉備氏、道氏、香夜氏の誕生である。スクラブ族は先祖であるオリジナル人類キブウカの名を使い、「吉備氏」を称した。キブウカ=キブ=吉備となる。吉備国がどのような国だったのか詳細は明らかではないが、彼らの正体は名前をトラッキングすることにより明らかだ。

吉備真備の孫である吉備全継（9世紀の人物）の子、吉備有成と吉備友成の兄弟は名前だけを残し、その他、家族、実績などの情報は全く残していない。だが、彼らは滅び行く吉備家を見限り、日本を離れてヨーロッパに移住したのではないかと考えられる。そのために記録が残されていないということは良くあることだ。推測として、西フランス王国に入植した彼らは現地人と結婚し、子供を儲けた。更に、その子供たちが儲けた子供たちの中にユーグ・ド・カペー（940頃誕生）がいた可能性がある。ユーグ・ド・カペーは、カペー朝を創始した男である。その根拠は名前であるが、カペーの由来はケペリと考えられる。ケペリ=ケペーリ=カペーとなる。カペー朝は987年から1328年まで続いたが、折りしも邪教クリュニー会が暗躍していた時期であり、正しい統治は困難だったと考えられる。

■相良氏の大航海時代～シャガールからミック・ジャガーまで

AD1094年、カペー朝のフィリップ1世は離婚・再婚を機にリヨン司教に破門を通告される。これを機に、フィリップ1世は子息のアンリ、シャルル、ウスタシーと関連氏族を引き連れてフランスを離れた。絶え間ないクリュニー会の陰謀のために精神的な疲労を覚えたためか、フィリップ1世の一行は、陰謀とは無縁な僻地を目指し、アフリカ大陸東海岸を南下した。彼らは現ジンバブエあたりに入植し、当地を「マプングプエ」と命名した。マプンの由来は不明だが、グプエの由来はカペーに間違いない。一方、ジンバブエを起点に、インド洋を越えていち早く日本に足を伸ばした一行は、九州に上陸して「相良氏」を生んでいる。相良（さがら）の名の由来はサカラバである。

フィリップ1世は現地人を統治し、マプングプエ王国を建設した。マプングプエ王国の情報は一切残っていないが、1220年にマプングプエ王国は滅亡している。これを機に、カペー家は200年余り暮らしたジンバブエを離れ、インド洋を横断し、アフリカ人の姿で日本に上陸した。彼らからはいくつかの氏族が生まれている。長宗我部氏、香宗我部氏、小早川氏である。対馬に移住した一行は宗氏と連合して「長宗我部氏」と「香宗我部氏」を生んだ。「長」の由来は不明だが、「宗」は宗氏、「我部」はカペーが由来である。一方、「香」の由来はフィリップ1世の子シャルル（カルル）の名に「香（かおり）」当て字したものである。

また、アフリカ人の姿をしたカペー家は、一部が土肥実平に接近して自身の血統を打ち立てた。この時に誕生したのが「小早川氏」の祖、土肥遠平である。小早川の名の由来は「グプエの川（

リンポポ川)」である。グプエ+川＝グプエ川＝小早川となる。残念なことに後年、小早川家は
大谷家（西本願寺）に乗っ取られている。

A D 1 5 8 1 年、相良氏の相良義陽は、伊東義佑と協力して島津義弘を挟み撃ちすることを謀ったが、島津氏の急襲により伊東氏が壊滅した。その後、島津氏が水俣城を水攻めにしたため、相良氏は降伏し、一部が故地マダガスカルへの帰還を図った。九州を発ち、インド洋を越えてマダガスカル島に辿り着くと、一部はサカラバ族と合流したが、一部は新天地を求めてヨーロッパへと旅立った。ヨーロッパに旅立った相良氏からはいろいろな名前が生まれた。「シャガール」「セガール」「ジャガー」などの名である。ヨーロッパの相良氏からは、画家マルク・シャガール、アクション俳優スティーブン・セガール、ローリング・ストーンズのミック・ジャガーなどが生まれている。特に日本人の奥さん进行、親日家として知られるセガールは明らかに相良氏の子孫だろう。彼は先祖の血に導かれ、日本に足を向けたわけだ。

一方、本家のサカラバ族だが、A D 1 7 世紀にフランス軍がマダガスカル島に侵入すると、一部のサカラバ族がマダガスカルを脱出し、相良氏が一部を治めていた九州に逃れた。九州に上陸した彼らは「桜庭」の名を形成した。桜庭の名の由来はサカラバである。桜島の「桜」の名も、サカラバが由来かもしれない。つまり、彼らの最初の上陸地点は島津氏が統治する薩摩だった。

第五章 ナナブルクの超古代史

■イベリア半島に生まれたニンフ～最古のヨーロッパ人

「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したキブウカは、現ベナンに「ナナブルク」を生んだ。湖水地方時代のキブウカ同様、ナナブルクは、現ベナンの海岸で小魚、甲殻類、貝類、昆虫類を獲って食べていた。そのため、身長は50cmのままであった。その後、アフリカの小人族が一堂に会した「キブウカの大移動時代（西方組）」が実施されると、ナナブルクもこれに参加し、ナイル河流域を泳ぎながら下り、天敵のクロコダイルに捕食されることもなく、古代の地中海にまで辿り着いた。

地中海を西に向かったナナブルクは、北極圏であったイベリア半島に入植した。これにより、褐色の肌を持つナナブルクの肌は白くなり、金髪・碧眼の特徴を得た。ナナブルクは、金髪の白人になっても昔通りの獲物を狩り続けていたため、身長は50cmのままだった。この小さい白人の存在は、背の高い黒人やオケアーニス大洋の娘たちが来訪した後もヨーロッパで語り継がれ、ニンフの伝説を生むことになる。ニンフ（ニウンペー）の由来はナナブルクである。ナナブルク＝ナナブ＝ナナフ＝ニンフ（ニウンペー）となる。

湖水地方時代、人類の存続と繁栄を旨に各々が各々の獲物に特化する必要性があった。ナナブルクの先祖キブウカの場合は、昆虫などに特化していたため、身長が50cmと低かった。しかし、新天地ではその必要性が無効化された。そのため、一部のナナブルクは、大型哺乳類、大型魚類など、大きめの獲物に特化した。すると、ナナブルクの身長はみるみる160cm～170cmほどになった。彼らは、ディンカが生んだ目が小さく、背の高い白人の子孫とは異なり、目が大きく、背が低めの金髪・碧眼の白人の祖となる。ナナブルクは、イベリア半島に「ナバラ」を築いた。ナバラの名の由来はナナブルクである。ナナブルク＝ナブル＝ナバラとなる。古代のナバラが、ニウンペーたちの生息圏、発祥の地だったと考えられる。

小人症は奇形の症状とされているが、顔が普通人と同じサイズながら腕や脚が短く、身体が小さい人だけではなく、顔と腕と脚、身体全体のバランスが良い小人症の人もある。彼らは実際には小人症ではなく、古代の小人族ナナブルクの身体的特徴が隔世遺伝によって突発的に発現した人々と考えられる。彼らは、例え成人ではあっても、身長は1m近くしかない。しかし、身体のバランスが良いために見た目には小人ではなく、普通の幼児にしか見えない。アメリカには、1940年代に製作されたカルト映画「ちびっこ街の恐怖」という、小人症の人ばかりをキャストとして集めた風変わりな西部劇がある。

映画「オズの魔法使い」も小人がたくさん登場する映画として有名だが、これらの映画には、ニウンペーと呼ばれたナナブルクの子孫のような顔と身体のバランスが良い小人がたくさん出て

くる。彼らの通常人と異なる容姿は、超古代にナバラで暮らしていたニンフたちの姿そのものであり、知られざる古代人の名残りを現代に伝えているのだ。超古代のナバラでは、ニンフは水中生活に特化し、小魚、水中の小動物、昆虫などを食べていた。彼らは先祖のキブウカと同様に体全体を使って泳ぎ、ペンギンのように自在に水中を飛び回っていただろう。ヨーロッパの白人が、ヨーロッパの先住民族ニュンペーと共存した記憶がニンフの伝説の原型であり、原風景となっている。

■妖精が築いた古代都市～ニップール、ニネヴェからネパールまで

30万年前は人類の歴史が大きく動いた時代であるが、ヨーロッパの小人族が一同に介し「第2次キブウカの大移動時代」が実施された。もちろん、ナバラのニュンペーもこれに参加し、地中海を離れて古代のメソポタミアに入植し、シュメール人の都市国家として知られている「ニップール」「ニネヴェ」などを築いている。ニップールとニネヴェの名の由来はどちらもナナブルクである。ナナブルク＝ナブル＝ニップールとなり、ナナブルク＝ナナブ＝ニネヴェとなる。ニップールやニネヴェはシュメール人の時代に建設されたのではなく、30万年もの歴史を誇る古代王国なのだ。ニップールやニネヴェには、金髪・碧眼・白い肌の小人族が暮らした。

古代メソポタミアの地に暮らしたナナブルクは、波状的にインド方面に拡大し、現ネパールに入植している。ネパールの名の由来はニップールである。一部のナナブルクは、ネパールでも小魚、昆虫などを食べていたが、各々の獲物に特化という湖水地方時代の決めごとが無効化されたため、一部は大型哺乳類などを狩って食べるようになった。これにより、身長50cmのナナブルクは、みるみる160cm～170cmにまで巨大化した。彼らは、ネパール人の祖となる。ネパールには小人の伝説などは残されていないため、小人族は淘汰されたか、或いはネパール人に吸収されてしまったのだろう。インドなどと比べ、ネパールに隔絶した印象があるのは、ネパールがヒマラヤ山脈の麓に築かれたという立地条件以上に、異なる人類、小人族ニュンペーの土地だからかもしれない。

■プレークサウラーの遺伝子～ピラコチャと蛭子神

30万年前にナナブルクが「第2次キブウカの大移動時代」に参加した際、一部は大移動時代の終点である東南アジア～オセアニアにまで達した。古代オーストラリア大陸に入植したナナブルクは、最初的人类エスやオケアーニス大洋の娘たちのエウローペーと組んで「プレークサウラー」を生んだ。プレークサウラーの由来はナナブルク、エス、エウローペーの組み合わせである。ナナブルク＋エス＋エウローペー＝ブルクエスエウロー＝プレークサウラーとなる。プレークサウラーも、エウローペーと同じオケアーニス大洋の娘たちの一族として「神統記」にカウントされている。

プレークサウラーは、現マレー半島を中心に生活圏を築いていたため、マレー半島に「ブリ族

」「ブル族」「ブルガン族」「ベル族」「ヘロン族」「ホアウル族」などの、現在、先住民として知られる部族を多く生んでいる。いずれの名の由来もブレークサウラーである。一方、30万年前に死の種族タナトスが出現すると、これを嫌った混血部族の多くがオーストラリア大陸を離れた。多く実施された大移動時代のひとつに「サンガリオスの大移動時代」がある。これは、古代ミャンマーに棲んでいたシャンカレー族が主導した大移動時代である。

「サンガリオスの大移動時代」はオーストラリア大陸を発し、徒歩でアリューシャン列島、北アメリカ大陸、ユカタン半島を越えて一気に南アメリカ大陸に至った人類初の大冒険であった。先住者としては、獣人の血を継いだインディオが既に居住していた。東南アジア人、メラネシア人の容姿をしていたブレークサウラーは、先住民と混合し「ピラコチャ」を生んだ。ピラコチャの名の由来はブレークサウラーである。ブレークサウラー＝ブレークサ＝プレクサ＝ピラコチャとなる。ピラコチャは、インカ帝国時代に太陽神として祀られている。

ピラコチャは、王族として古代チリを正しく治め、平和な時間は数万年続いたと考えられる。だが、BC40世紀に「シュメール人の大航海時代」が古代チリに到来した。この大航海時代によって現ペルーに上陸した人々からアブラハム、イサク、ヤコブが生まれ、聖書に描かれたドラマが古代のペルーを舞台に展開されることになる。だが、それよりも恐ろしいことに、シュメール人の船団には、パプアで拾ったカウレ族とモニ族の他に、人喰い人種ダニ族（死の種族タナトスの末裔）が紛れ込んでいた。

ダニ族が一旦ピラコチャの王国に上陸すると、嘘つきの天分を発揮し、ウソと欺瞞、脅迫によって最下層の人々を信者として大量に取り込み、一大勢力となって、数で圧倒する形でピラコチャの王族を圧倒した。ダニ族は、平和だったピラコチャの王国を篡奪し、ウソを真実として善人に強制し、人身御供のような反自然的な儀式を正統な式典として根付かせた。平和だった時代には、誰も考えもしなかったカニバリズムのような残虐な行為さえ世に蔓延した。

これに激怒した宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）は、核攻撃によってダニ族の都市を焼き尽くし、熱線によってダニ族を微粒子のレベルにまで分解した。これにより、現ペルーに建てられていたチムー王国、現チリに存在したピラコチャの王国が巨大な砂漠と化した。ナスカ平原やアタカマ砂漠が、上記の古代王国の成れの果てである。その後、宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）は、チムー王国とピラコチャの哀れな民を全員、出羽国に導いた。これが「サムエルの大航海時代」である。

砂漠化した故地を後に、無事に出羽国に到達したピラコチャの一行は、「蛭子神（ひるこ）」と呼ばれた。ひるこの名の由来はピラコチャである。蛭子神は、生まれてすぐに海に流されてしまうという悲劇的な運命を背負った神だが、このエピソードは実際には、出羽国に到達したピラコチャが出羽に居を得ることなく、水生生活に転じ、水生人として生きたと考えることができる。それが蛭子神の「海神」としての馴れ初めかもしれぬ。

BC35世紀以降、日本列島は葦原中津国（九州）から出羽国（東北）までをエジプトと呼ばれ、葦原中津国（九州）から沖縄諸島、高天原（台湾）まではイスラエルと呼ばれた。その時代

には、パラオ諸島に拠点を持っていたダニ族が自身をファラオと称し、日本列島を支配していたが、ウソを真実として強制するダニ族を嫌って日本の縄文人（エジプト人、イスラエル人）が大挙して夏時代の中国（カナン）に移住した。これが「モーゼスの大移動時代」である。

その後、古代モンゴルに入植した縄文人がサウル朝とソロモン朝を築き、十和田の縄文人は現チベットにはダヴィデ朝を築いた。この時代に、蛭子神はイスラエルの士師「バラク」と呼ばれ、古代メソポタミアでは「ペレグ」と呼ばれ、アーリア人の集団に参加した時には「ブリグ」と呼ばれた。バラクもペレグもブリグも名前は異なれど、同じ人々であり、蛭子（ひるこ）或いはピラコチャ、またはプレークサウラーを由来にしている。西本願寺門主大谷光照の孫である犯罪者バラク・オバマが由緒あるバラクの名を使っていることは痛恨の極みである。

第六章 ムンビの超古代史

■妖怪キジムナーの歴史Ⅰ～超古代のムンバイ

沖縄の妖怪として知られるキジムナーは、じつは我々と同じ人類である。まず、キジムナーはオリジナル人類のムンビとカゾオバが合体することで、１００万年前の地中海に生まれた。妖怪と呼ばれているキジムナーは、じつは少数民族のようなものである。カゾオバ＋ムンビ＝カゾムン＝カゾムナ＝キジムナーとなる。そして、キジムナーの片割れであるオリジナル人類のムンビは、２００万年前に現ケニアの海岸で生まれている。水陸両用の生活をしていたムンビは、現ケニアの海辺でも小魚、貝類、甲殻類を獲物に特化していたため、身長はカゾオバと同じ１ｍのままであった。

ムンビが、１００万年前に「キブウカの大移動時代（西方組）」に参加することで地中海に生まれたキジムナーは、北極圏であった地中海で、永い年月を経て褐色の肌が白くなり、黒髪は赤色に変色した。白い肌と赤い髪は、目撃者による沖縄のキジムナーの特徴と同じである。その後、３０万年前に「第２次キブウカの大移動時代」が実施されると、白い肌で赤い髪のキジムナーは、地中海を離れてインドに入植し、「ムンバイ」を築いた。ムンバイの由来はムンビである。ムンビ＝ムンビイ＝ムンバイとなる。

白い肌を持っていたキジムナーは、インドで再度、肌が褐色に変化した。更に、湖水地方時代、人口密度の影響でオリジナル人類はそれぞれ、各々が各々の獲物に特化していたが、新天地ではその必要がなくなったため、小魚、昆虫を食べていたムンビは、大型哺乳類、大型魚類など、好きな獲物を食べることで巨大化した。身長１ｍから１６０ｃｍほどになったムンビは、容姿にメラネシア人の要素を持つインド人の祖となった。

また、３０万年前に「第２次キブウカの大移動時代」に参加したキジムナーは、終点である東南アジア～オセアニアに到達すると、そこから独自に北上し、沖縄諸島に辿り着いた。インドで赤黒い肌になったキジムナーは、先住者である最初的人类エスと共存した。その後、日本や中国、東南アジアから来た後進の人々と共存し、漁の手伝いをするということもあったという。

琉球王国などが築かれた中世以降も、キジムナーは現地人の船に乗って共同で漁を行い、夕食時にはかまどの火を借りに来たという。年の瀬は一緒に過ごすなど、人間の「隣人的」な扱いを受けていた。人間の家に嫁ぐこともあったといわれているほどだ。基本的に品行方正だが、自分の棲家である古木を切り倒されると、切り倒した人の飼っている家畜を全滅させたり、船を沈めたりするなど、一旦恨みを買うと徹底的に復讐をされたという。

第二章「カゾオバの超古代史」で触れているが、オリジナル人類カゾオバからは小人族の宇宙人、スバル人が生まれている。このスバル人は、宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）が発明した科学の最先端をいく道具を、家族であるキジムナーを援助するために与えているのだが

、家畜を全滅させたりするのはその道具が原因だろう。近代には、キジムナーは妖怪として知られるようになるが、現在も目撃談が絶えず、現地人の間では実在していると信じられている。

一方、沖縄諸島から日本列島に移ったキジムナーは、河童と共存することで「カワランベ」と呼ばれた。カワランベとは、河童の数ある別称の内のひとつであるが、カワランベの名の由来は「河原のムンビ」である。河原＋ムンビ＝河原ンビ＝カワランベとなる。また、河童の一族から離脱した一部のムンビは、山岳部の奥深くに棲むことで「ヤマンバ（山姥）」と呼ばれた。ヤマンバの名の由来は「山のムンビ」である。山＋ムンビ＝山ンビ＝ヤマンバとなる。その後、ヤマンバに「山姥」の漢字が当て字されている。山姥は一方では人間を獲って食うと言われ、一方では迷子の子供を助けることもあるという。結局、山岳部の奥深くに潜むように暮らしているムンビたちは、人間に干渉されるのを防ぐため、そして平穏な生活を守るために「人を獲って食う」とウソをついているのだろう。

■妖怪キジムナーの歴史Ⅱ～魔王ラーヴァナに対峙する猿神ハヌマーン

30万年前にインドに「ムンバイ」を築いたオリジナル人類ムンビは、同じ頃にいくつかの神の化身を生んでいる。ムンビは、「天地創造の神アーリマン」「創造神ブラフマン」「猿神ハヌマーン」を生んでいる。名前は異なるが、この3者の神々は3人でひとり、ひとりで3人と考えられる。アーリマンの由来はムワリとムンビの組み合わせであり、ムワリ＋ムンビ＝ワリムン＝アーリマンとなる。ブラフマンの由来はカゾオバ＋ルハンガ＋ムンビの組み合わせであり、カゾオバ＋ルハンガ＋ムンビ＝バルハムン＝ブラフマンとなる。ハヌマーンの由来はルハンガとムンビの組み合わせであり、ルハンガ＋ムンビ＝ハンムン＝ハヌムン＝ハヌマーンとなる。

アーリマンは、マズダ教以前のペルシアではミトラの第一従神であり、ブラフマンは、ヒンドゥー三大神のひとつである。ハヌマーンは、獣人でもある地球の王ルハンガの血が流れているため「猿神」と呼ばれた。ハヌマーンの姿は、身長4mを誇ったルハンガの姿を現在に留める獣人UMAオラン・ダラムと同じ姿だったと考えていい。BC11世紀当時、まだ新緑豊かで豊富な水源に恵まれていたアラビア半島。そのアラビア半島で栄華を誇っていたローマ王国と隣国のアルバ・ロンガ王国が「マハーバーラタ戦争」の一環で戦争を始めた。いわゆる「ラーマヤナ戦争」だが、この戦争はインドとセイロン島ではなく、アラビア半島を舞台に行われた。そして、新緑まぶしい水資源が豊かだった土地アラビアは、大量の核兵器を使用したこの戦争が原因で巨大な砂漠と化した。

ラーマ皇子（個人の名ではなくローマの皇子を意味する）と魔王ラーヴァナ（タナトスの一族）が戦った際、猿神ハヌマーンはラーマ皇子に加勢している。魔王ラーヴァナの本拠地だったとされるランカー島（セイロン島）だが、これは、もともとアルバ・ロンガ王国の領土である。つまり、魔王ラーヴァナは別にランカー島にいたわけではなかった。ラーマ皇子が統治するローマ王国のすぐ隣にいたのだ。アルバ・ロンガの名の由来はアラビアとランカーの組み合わせである

。アラビア+ランカー＝アラバ+ランガー＝アルバ・ロンガとなる。王国時代のローマ王国もアルバ・ロンガ王国もエトルリア王国も、実はどれもイタリア半島ではなく、古代のアラビア半島に立地していた。

第十一章 チュクウの超古代史

■巨大クロコダイルを狩り、剣歯虎と戦う獣人～地球の王チュクウ

およそ200万年前「ビクトリア湖の大移動時代」に参加したルハンガは、ナイジェリアに移り住み「チュクウ」を生んだ。陸を移動した彼らの遺骸は、人類学者によってギガントピテクスと呼ばれた。チュクウは、ルハンガから身長4 mの巨軀を受け継いでいたが、彼らはニジェール川で更に4.5 mにまで身長が伸びた。その巨体で、チュクウはニジェール流域の覇者となった。チュクウはまず、河川に於いて食物連鎖の頂点に位置づけられた。その後、チュクウはライオン、ハイエナ、ヒョウ、カバ、ゾウなど、天敵がいない動物の天敵として機能した。チュクウは、現ナイジェリアの沖合いに出てサメなども素手で狩っただろう。

サスカッチ、イエティ、ヨーウィなどの未確認動物、獣人などは、間違いなく、ルハンガ、チュクウの子孫である。ロバート・マイケル・パイル著「ビッグフットの謎」では、ビッグフットらは、3 mの跳躍を見せ、時速60 kmで走り、岩を投げ、素手で猛獣を殺すことができる。また、彼らは円形の闘技場を作り、拳闘に励み、アジアの言葉に似た独自の言葉をしゃべると報告されている。チュクウは非常に卓越した身体能力を持ち合わせ、それに見合った知性も秘めているのだ。

ただ、どんなに優れた種にもできそこないは生まれる。チンパンジーの群れでは、子供をいじめるような個体は集団で無視され、拳闘に群れを追放されることがある。これにより、できそこないは野垂れ死にを迎えるが、こうしてできそこないを淘汰することでチンパンジーは平和に暮らし、種を正しく存続することが可能なのだ。

これらのことは、現代人の間ではタナトスによって廃止されたが、ビッグフットの部族内では今でも実施されている。たまに、人を殺して食べたり、女性を誘拐してレイプするサスカッチの報告があるが、これは、群れを追放されたビッグフットのできそこない（凶暴、残虐、復讐心が強い、嘘つきなど問題がある）の仕業だろう。だが、できそこないであってもグリズリーでさえ素手で殺せるわけで、サスカッチのできそこないは野垂れ死にせず、ひとりで森の中で生きているのだ。運が悪ければ、このような個体に出くわし、恐ろしい思いをすることになるかもしれないし、運が良ければ、山奥に棲む地球の王に謁見することができるかもしれない。

およそ100万年前、古代ナイジェリアのチュクウの集団に大きな変化が起きた。その知性ゆえに冒険心をくすぐられた彼らは「チュクウの大移動時代」を敢行した。古代ニジェール流域を離れた彼らは、ビクトリア湖に立ち寄り前身部族ルハンガを迎えて、他のオリジナル人類モリモなどと同様にアフリカを出てインドを越え、チッタゴンに入植した。この時、チュクウはミャンマーの少数民族として知られる「チャク族」を生んだ。チャクの名の由来はチュクウである。チュ

クウ＝チャクウ＝チャクとなる。

チッタゴン到着後も彼らは毛深く、依然として4.5 mの巨軀を誇っていた。そして、50万年前に新しいオリジナル人類の一団が訪れるまで、チュクウはナイジェリアでの暮らしと同じ暮らしを送っていた。イエティの姿をしたチャク族は、メコンデルタに移って主食である巨大ワニを狩り、時折はインドゾウやインドサイなども狩ったと考えられる。だが、その後の100万年間にミャンマー人に吸収され、名前だけがチュクウの名残りとなった。だが、身長が4.5 mを超える真のチャク族の生き残りはヒマラヤ山脈に落ち延び、イエティと呼ばれている可能性がある。つまり、「チャク」と呼びかければイエティは応答するかもしれない。

およそ50万年前から45万年前にかけて、人類随一の知性を誇るクウォスやヴィディエラ、アフリカ大陸を旅立った新しいオリジナル人類が、チャク族（イエティ）が暮らすチッタゴンに到着した。異なる人類同士である彼らは接近遭遇を介し、人類初の混血部族をたくさん生んだ。地球最強の捕食者らしい獣人然とした佇まいと4 m～4.5 mの巨軀を誇るチュクウとルハンガは、自分に比して小さい1/2ほどの身長しかないクウォスらと交わり、2 m～3 mの身長を誇る半獣人部族を生んだ。この古（いにしえ）の混血部族の生き残りは現在でも存在しており、カナダではサスカッチ、アメリカではビッグフット、オーストラリアではヨーウィ、中国ではイエレン、ロシアではアルマスなどと呼ばれている。

「神統記」では、この獣人を人種母体とした人類初の混血部族は「ギガース」と呼ばれている。ギガースの名の由来はチュクウとクウォスの組み合わせである。チュクウ＋クウォス＝クウォス＝ググォース＝ギガースとなる。「神統記」を見れば分かるが、この時に生まれたギガースの仲間にはアグリオス、アルキュオネウス、エウリュトス、エピアルテース、エンケラドス、グラティオン、クリュティオス、パッラース、ヒッポリュトス、ポリュポーター、ポルピュリオン、ミマースがいる。

45万年前、こうしてギガースの部族が東南アジアに誕生したのだが、彼らは獲物を求めて波状的に古代中国の地に移り住んだ。この時代、地球の王ルハンガの名を採って中国は「盤古（パングア）」と呼ばれた。中国で目撃されるイエレンは、この時に中国に移り住んだギガースの面影を残している人々である。その後、北方の地シベリアがマンモスの宝庫だと知った彼らは、盤古（中国）から先に更に歩（あゆみ）を進めて北上し、モンゴル～シベリアに腰を落ち着けると素手で、或いは棍棒を片手にマンモスを狩って生きた。

しかしマンモスの数が減ると、彼らは更なる獲物を求めてツングース～カムチャツカ半島を抜け、当時の北極圏であるアリューシャン列島～アラスカ地域を通過して現在でいうところのカナダ北部に到達した。この地上最強の捕食者たる獣人部族が到来したことにより、北アメリカ大陸にたくさん存在した巨大哺乳類は絶滅してしまった。これを便宜上「獣人の大狩猟時代」と呼ぶが、獣人たちは剣歯虎などと素手で戦い、殺しすぎたため、残念ながら絶滅させてしまった。

根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。目撃者はイエティがどのようにして獲物を狩るか詳細に伝えている。「イエティはヤクの

二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、地球の王である獣人が、通常の人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。

■最大最強の怪物テュポンの遺伝子～宇宙人の歴史

7万年前、魔神クロノスの姦計により天空神ウラヌスと共に古代ギリシアを追放されたギガースの集団は、混血部族の故地である古代オーストラリア大陸（タルタロス）に移り住んでいた。古代ギリシアは魔神クロノスによって3万年近く支配下に置かれたが、人類をタナトスの邪教とその魔手から救うべく、全能神ゼウスが出現した。「神統記」にもあるようにゼウスは、クロノスをオーストラリア（タルタロス）に追放した。だがこれにより、逆にクロノスはウソの天分を発揮してオーストラリアに住んでいた恐ろしいギガースたちを邪教の信者として獲得し、この無敵の獣人軍団を自由自在に操る立場を得た。

およそ4万年前に起きた全能神ゼウスと獣人ギガースの戦い。これが「ギガントマキア」であるが、狡猾なクロノスは4.5 mの巨躯を誇るチュクウ（イエティ）やルハンガ（オランダラム）さえも信者として治め、最後の切り札として全能神ゼウスにぶつけた。このとき、チュクウとルハンガは地上最強最大の怪物テュポンと呼ばれた。テュポンは地球の王チュクウとルハンガの連合軍であるため地上最強最大の怪物と呼ばれるのも無理はない話である。テュポンの由来はチュクウとルハンガの組み合わせである。チュクウ＋ルハンガ＝チュハン＝チュパン＝テュポンとなる。「神統記」では、テュポンはゼウスが放った稲妻を頭部に受けて敗北し、タルタロス（古代オーストラリア）に封じ込められたとされている。

タルタロスに封じられたテュポンは、古代オーストラリアでは虹蛇タイパンと呼ばれた。テュポンは、同じくギガントマキアで敗北してタルタロスに封じられたアルキュオネウスと連合し、新しい混血部族「トバルカイン」を生んだ。トバルカインの名の由来はテュポンとアルキュオネウスの組み合わせである。テュポン＋アルキュオネウス＝テュポルキュオネ＝トバルカインとなる。「聖書」では、トバルカインは鍛冶屋であり「カインの末裔」として知られている。

トバルカインはその後、科学の種族として南極大陸（五岳神の国）でU F Oを発明することになる。つまり、トバルカインは所謂（いわゆる）宇宙人の祖である。トバルカインは4つのオリジナル人類の合体部族であるため、後に4つに分離し、チュクウのトバルカイン、ルハンガのトバルカイン、オロクンのトバルカイン、クウォスのトバルカインに分かれている。科学の種族にはトバルカイン以外にもエラド、マハラエルがいる。エラドとマハラエルも、「聖書」では「カインの末裔」として記されているが、実際にはトバルカインと同様にギガースの部族に属している。エラドは獣人エウリュトスの子孫であり、マハラエルはオリジナル人類ワルムベと獣人ブリアレオースの合体部族である。

科学の種族トバルカインの他の三部族が南極大陸（五岳神の国）でU F Oの研究開発をしていた時、チュクウのトバルカインは古代マヤに住み、「創造神テペウ」と呼ばれていた。テペウの名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝トバウルカイン＝トバウ＝テペウとなる。テペウはマヤの王としてマヤ人を統治していたと考えられる。このマヤ時代に、テペウは北アメリカ大陸に進出し、一部がコロラド流域に暮らしている。この時にインディオの部族として知られている「テワ」「ティワ」「トワ」が生まれている。マヤ人やアメリカインディアンは「自分たちは宇宙人の子孫だ」とまことしやかに伝えているが、経緯が不明なだけで、彼らの主張は正しい。

■最終戦争ラグナロク～十和田の宇宙人と栄光の縄文時代

2万年前、中央アメリカから北アメリカにかけて偉大な古代王国が林立していた。北アメリカにはミドガルド王国（現カリフォルニア～ネバダ）、常世国（現ユタ）、ヴァルハラ王国（北メキシコ）、ベラクルス王国（南メキシコ）、アースガルド王国（現バンクーバー～マヤ）などの国家が繁栄を極めていた。しかし、パプアに棲んでいたダニ族（クリュティオスのタナトス）が太平洋を越えてヴァルハラ王国に侵入し、悪神ロキなどを生み、北アメリカ侵略の足場を得た。その後、ダニ族はミドガルド王国に侵入すると神の種族「ヴァン神族」と称し、「死神ヘル」「フェンリル」などを生んだ。ヴァン神族は邪教によって大勢の信者を獲得し、その邪教信者をインフラ全般に送り込んでいたため、北アメリカの古代王国はヴァン神族に逆らうと生きていけないような状態に陥っていた。つまり、人々は生活の保障を求めて進んで悪に服従した。こうして、ヴァン神族は北アメリカの古代王国を支配下に置いた。

戦うことを放棄し、問答無用で悪に服従し、自分の意思に反し、何でも悪の言いなりになって悪事の代行をしている人々の姿を見て激怒したトバルカインは、開発したばかりの核兵器を北アメリカの古代王国に数百発お見舞いした。もちろん、核攻撃に至るまではいろいろな駆け引きがあったとは思いますが、詳細は不明であるため、細部はご想像にお任せする。この大規模な核攻撃により、ヴァン神族とその邪教信者たちは無に帰したのだが、放射能によって大陸の森林地帯は緑が死滅し、荒廃した一帯は砂漠と化した。ネバダ砂漠、北メキシコの砂漠地帯は、最終戦争ラグナロクの名残りである。これは、およそ2万年前のできことである。

最終戦争ラグナロクは人類初の全面核戦争だったが、あまりの威力に罪悪感を感じたチュクウのトバルカインは科学を放棄することを誓い、荒廃した故地を後に、善人の一団を率いてアメリカ大陸を離れて古代日本に上陸し、東北地方に入植した。この時に「出羽国」が誕生した。出羽の由来はテワである。ただ、核兵器で死滅したはずのダニ族は生き延びており、最悪なことに、日本に移住する大航海時代の船団に紛れ込んでいた（詳細は別著「悪い顔」を参照いただきたい）

■伊賀忍者の歴史～タナトスの奥義を学んだ諸葛孔明

BC 35 世紀、ダヴィデ朝とソロモン朝の時代にトバルカインは預言者ナタンの一族を標的に再度核攻撃を実施したため、ダヴィデ朝トソロモン朝が滅んだ。この核攻撃により、モンゴルにゴビ砂漠やタクラマカン砂漠が生まれ、チベットが砂漠気候と化した。この時の戦争は「黙示録アルマゲドン」と呼ばれている。これを機に、科学を放棄したはずのチュクウのトバルカインは、オロクンのトバルカインが科学の放棄を決定したため、オロクンのトバルカインの代わりに科学を継承した。

一方、科学放棄の決定を覆さなかった一部チュクウのトバルカインは「ダヴィデの一族」となる。彼らは帝王や皇帝を生む部族としてエジプト文明、メソポタミア文明を皮切りに、歴史を変えた数々の皇帝を生んでいる。アレキサンダー大王、ユリウス・カエサル、秦の始皇帝、アウグストゥス、イエス・キリスト、諸葛孔明、シャルルマーニュ皇帝、アルフレッド大王、オスマントルコ帝国、チンギス・ハーン、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、道光帝、ナポレオン・ボナパルト、ルーズベルト大統領、チャーチル首相、ヨシフ・スターリン、毛沢東、ケネディ大統領、ホメイニ師、プーチン大統領、習国家主席、トランプ大統領などの豪傑を生んでいる。彼らはダヴィデ王を祖とする、祖を同じくするひとつの家族である（詳しくは別著「ダヴィデの一族」を参照のほど）。

ところで、みなさんは諸葛氏（しょかつ）の中国語読みが「ジューガー」であることを知っているだろうか？名前を知って歴史を知る方法では現地の発音が非常に重要である。諸葛の発音がジューガーであることを知らなければ、諸葛氏が「伊賀」の生みの親だという事実も知ることはなかった。そう。伊賀の名の由来は諸葛（ジューガー）であるが、名前で諸葛氏が伊賀を築いたことが分かる次第である。ジューガー＝ユーガー＝ユガ＝伊賀となる。そして伊賀忍術は、孫武が中国に伝えたタナトスの奥義を翻案した「孫氏兵法」を継承した諸葛孔明による、戦わずして勝つ「諸葛孔明の兵法」が踏襲されている。

戦国時代、忍者はひとつの権威であり、彼らの情報を疑う者は皆無だった。そもそも忍者を疑うなら忍者を徴用する事もないのだが。それほど忍者は重宝されていた。彼らがそれほど信用されたのは、ひとつに彼らが政治的信条を持たない中立を旨とする勢力であるという点が大きい。また、忍者は江戸時代にはお庭番として幕府に仕え、大奥を管理していた。この時に陰謀マスターである彼らは大奥だけでなく、武家や公家、豪商の娘たちのために、好きな男の子を産ませるサービスを実施した。

「いい女が選んだ男なら間違いない」ということで、お家存続を求める支配層のために彼らは優性遺伝子ブリーダーとして働いた。江戸時代には、西本願寺門主良如が生んだ火付け盗賊改めが非道の限りを尽くしていたが、優性遺伝子ブリーダーはこれを無視し、関わることはしなかった

。この政治的信条を持たない秘密結社には、ダヴィデの一族（愛新覚羅家）やナタンの一族（大谷家）からそれぞれ選ばれた人々が中立を旨に所属している。しかし、実際には愛新覚羅家の思惑とは反対に中立は反故にされ、大谷家出身の忍者は大谷家のために働くことが多い。そのため、絶対機密のはずの愛新覚羅家の家系は大谷家側にダダ漏れであり、逆に大谷家の家系は極秘扱いされ、誰にも知られることはない。更に、医療行為は殺人行為であることを知らない愛新覚羅家は、大谷家の医者によって騙され、たくさんの優れた仲間を殺されている。優れた仲間の死。これは一族の弱体化である。

ここで優性遺伝子ブリーダーの仕事ぶちを紹介したい。わかりやすい例として芸能界を取り上げると、みなさんも良く知っているＴＩ氏は山口組三代組長田岡一雄の子である。一方、さる人気番組でＴＩ氏と共演していたＭＮ氏は山口組初代組長山口春吉の孫である。怖い話で有名なＪＩ氏や、芸人のＪＮ氏など、山口春吉の子孫は芸能界に多いようだ。意外なようだが、田岡一雄と山口春吉は「ダヴィデの一族」に属する。暴力団とひとくちで言っても上層部の人々はみな強い人々であり、英雄、豪傑の子孫である。そして、犯罪とは一番遠く隔絶した位置に立つ。街の喧嘩の仲裁もヤクザさんに任せた方が容易に解決する。おまわりが絡むと解決するものも解決しない。

珍しいところで、芸人のＯ氏やＴ氏は中国の犯罪秘密結社として知られる「青幫」の首領の子である。顔が良く似ている。青幫の３人の首領（杜月笙、張嘯林、黄金榮）もみな「ダヴィデの一族」に属している。上記の人々はみな、偉大な男の遺伝子を所望した女が優性遺伝子ブリーダーに仕事を依頼したことで生まれた人々である。ただ、今の芸能人は強い先祖のように戦うことを忘れ、ゲイ事に現（うつ）を抜かしている。安倍が極悪な悪党であることも見抜けない。そのため、現在の日本は惨憺たる様相を呈している。その点が残念でならない。

■甲賀忍者の歴史～タナトスの奥義を学んだカーカティヤ朝

ギガースを生んだチュクウは、ギューゲースとしてギガースとは別の獣人集団ヘカトンケイルに参加していた。ギューゲースは、人類の歴史が大きく動いた３０万年前に「カイコス」を儲けている。ギューゲース＝キューケース＝カイコスとなる。カイコスはオケアーニス河川の娘たちの神のひとりとして知られている。このカイコスは、オケアーニス大洋の娘たちに属するクリュメネーと合体することで「レメク」を生んでいるが、この連合体はレメクだけでなく「マゴグ」「マガン」なども生んでいる。というよりは、レメクもマゴグもマガンも名前が異なるだけでひとつの部族である。

ＢＣ３２世紀、「クマルビの大航海時代」によって出雲国に入植したマゴグからは加賀氏が生まれている。この加賀氏はＢＣ４世紀に「ヒッタイト人の大航海時代」に参加し、マヤに入植してツングースに棲息するオロク族（ウリゲン）と合体することで「ククルカン」を生んだ。ククル

カンの名の由来はマゴグ（加賀）とウリゲン（オロク）の組み合わせである。マゴグ＋ウリゲン＝ゴグリゲン＝コクリケン＝ククルカンとなる。

このククルカンの神族は2度に渡ってマヤを出撃し、東アジアに進出している。一度目は朝鮮半島に入植して「高句麗」を築いたが、二度目は房総半島に上陸し「九十九里」を築き、「菊理媛神」を儲けている。いずれの名もククルカンが由来である。二度目の移住は7世紀の頃の話である。その後、ククルカン神族は雲南に「閭氏」、ベトナムに「曲氏」を儲けると、インドに「カーカティヤ朝」を開いている。カーカティヤの名の由来はグーゲースとヴィディエの組み合わせである。グーゲース＋ヴィディエ＝グーゲディエ＝キューケティエ＝カーカティヤとなる（ヴィディエの名を借りたのはヴェッダ族が住むランカー島を通過してインドに入植したからと考えられる）。

ロシアから日本に向かう途上のリューリク家（ダヴィデの一族）のイジャスラフ3世は、インド通過中、12世紀に滅んだカーカティヤ朝を訪れた。カーカティヤ王家はイジャスラフ3世と意気投合し、両家は共に日本に渡った。九州に上陸したカーカティヤ家は「菊池氏」を生み、畿内に進んだリューリク家はカーカティヤ家と組んで「六角氏」を生んだ。菊池の由来はカーカティヤであり、六角の由来はリューリクとカーカティヤの組み合わせである。カーカティヤ＝カカティ＝菊池となり、リューリク＋カーカティヤ＝リクカーカ＝六角となる。

更に、両家は伊賀国の隣に甲賀国を建てた。甲賀の由来はカーカティヤである。カーカティヤ＝カーガティヤ＝カーガ＝甲賀となる。筆者の説をうまい具合に証明する如く、六角氏が甲賀忍者を統率し、伊賀国の一部も治めていた。伊賀忍術は「諸葛孔明の兵法」を下敷きにしていたが、甲賀忍術はマウリア朝の陰謀家カウティリヤ（じつはアリストテレス）の「実利論」を下敷きにしていた。いずれもダヴィデの一族の産物である。

■巨石の種族デウカリオンの歴史（ピラミッド派）～地球の王の記念碑ピラミッドから技術を伝える手段としてのモアイ製作まで

謎の巨石建造の種族。いや、一般的には巨石建造物を残した人々がひとつの種族と考えられてはいない。しかし、彼らはティカル人という名前がある。ティカルという名前はマヤに残されているが、ティカル人の前身はデウカリオンである。デウカリオンの名の由来はテュポンとアグリオスの組み合わせである。テュポン＋アグリオス＝テュグリオ＝デユグリオン＝デウカリオンとなる。そしてティカル人の由来はデウカリオンであり、デウカリオン＝デウカリ＝ティカルとなる。

1万3千年前、デウカリオンは全能神ゼウスに世界が滅ぶことを知らされ、ノアと同じように巨大な船を建造して大洪水時代を乗り越えた。彼らは、実際には古代オーストラリア大陸に住んでおり、ポールシフトに起因する大地殻変動が起きると、9日間、海の底に沈んだ故地を離れ、船でメソポタミアにまで逃れた人々である。彼らは偉大な先祖に捧げる神殿を築くことをはじめた

。最初の作品がギョベクリ・テペの神殿である。この神殿は大地殻変動から2500年経ってから築かれた。それから4300年後にチャタル・ヒュックに神殿が築かれ、更に3500年後にジュンガンディーヤ神殿がマルタ島に築かれた。彼らは1戸経てるために数千年を費やしているわけではなく、他にも建てられたのだがまだ発見されていない、或いは「ソドムとゴモラ」「黙示録アルマゲドン」「マハーバーラタ戦争」「ラーマヤナ」などの核戦争で破壊されたのだ。

BC32世紀に起きた「第2次北極海ルート」の時代、ティカル人は宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）が統治する縄文人の土地「出羽国」に身を寄せ、「津軽」を築いた。津軽の由来はティカルである。ティカル＝チカル＝津軽となる。また、ティカル人はチュクウのトバルカインと組んで「十和田」を築いた。十和田の由来はトバルカインとティカルの組み合わせである。トバルカイン＋ティカル＝トバティ＝トハティ＝十和田となる。この出羽国の時代、ティカル人はチュクウのトバルカインと共に実験的にピラミッド（十和田湖の水中ピラミッド、黒又山）を建設していた。この頃に、ティカル人はチュクウのティカル人（ピラミッド派）とルハンガのティカル人（マウンド派）に分離した。

「モーゼスの大移動時代」が起きる前夜、マウンド派ティカル人は出羽国を離れて、太平洋とユカタン半島を横断し、北上してアイルランドに上陸した。「モーゼスの大移動時代」が起きると時を同じくして、マウンド派はアイルランドにマウンドに特化した造りの「ニューグレンジ」を手がけた。ピラミッド建造も同様だが、マウンド建造も目的は「巨人のモニュメント」の製作である。ティカル人は、偉大な先祖である地球の王チュクウとルハンガの記念碑として、ピラミッドやマウンドを世界各地に築いたのだ。だがマウンド派は8世紀頃を最後にマウンドの建造を中断している。そしてピラミッド派は、9世紀から12世紀頃を最後にピラミッドの建造を中断している。ピラミッド派はその後、イースター島に入植した。彼らは、いつの日かまた腕を振るう日が来ることを願いつつ、モアイ像を作り続けた。モアイ像を海岸に立てるまでに至るプロセスを通して巨石の切り出しや縦横無尽な運搬、自由自在なカービングなど巨石建造に関する技術を子々孫々に伝えるだけの毎日を送っていた（ティカル人の詳細は別著「ダヴィデの一族」を参照いただきたい）。

■暗殺奥義クリュプティア～タナトスの奥義を学んだソクラテス

■タナトスの天敵～全能神ゼウス戦記

45万年前の「獣人の大狩猟時代」、チュクウはアメリカ大陸では「ソーク」を名乗った。チュクウ＝シュクウ＝ソークとなる。現在でもインディオの部族名としてソーク族の名は残ってい

るが、現在では名前だけで、ソーク族の姿に古（いにしえ）のチュクウの面影は見られない。チュクウの遺伝子は、大型の母体人種アメリカ・インディオに飲み込まれ、名前だけを篡奪された形だ。

およそ35万年前、オリジナル人類エバシらがアメリカを訪れると、獣人たちはアメリカを新参者に譲り、自分たちはアメリカで育てた家畜類を率いて東アジアに帰還した。この時に「ソーク族（チュクウ）」は古代台湾に上陸し、台湾の先住民族として知られる「ツオウ族」を生んだ。ツオウの由来はソークである。ソーク＝ツオウク＝ツオウとなる。更に、ツオウ族はムシシ、ヴィディエと組んで「サイシャット族」も生んだ。

サイシャットの由来はツオウとムシシとヴィディエの組み合わせである。ツオウ＋ムシシ＋ヴィディエ＝ツオウシシディエ＝スオウシッシデ＝サイシャットとなる。このサイシャット族もツオウ族同様に台湾先住民として知られている。だが、彼らは実際には単なる先住民ではなく、神々を生んだ部族である。それは名前が証明している。だが現在、生活のために民族の歴史と先祖の魂を切り売りしている彼ら子孫の姿は見ていて悲慘としか言いようがない。

サイシャット族から国津神の塩椎神、素戔鳴尊、エジプトの女神イシス、アダムの子セツ、エジプト冥府の神セト、全能神ゼウスや、ペルセウス、テセウス、オデュッセウスなどの英雄が生まれている。

■地球の王～獣人UMAの歴史

第二十三章 エバシの超古代史

■古代人類アパッチ～アパッチ族は単なるアメリカ先住民族ではなく非常に古いタイプの人類だ

40万年前、古代のカメルーン沖に水生人として暮らしていたオリジナル人類エバシは、北アメリカ大陸に住むアパッチ族に似た姿をしており、言語を使用していた彼らは自らを「エバシ」と呼んでいた。エバシはやがて陸上生活にスイッチすると、アフリカ全土で大型哺乳類を狩って生きていたオリジナル人類が一同に介し「エバシの大航海時代」を実施した。アフリカ大陸を発ち、長い時間をかけて東南アジアに辿り着いたエバシは、古代の台湾に入植し、人類初の台湾上陸を果たした。この時に、現在でも先住民族として知られている「バブサ族」と「バサイ族」が生まれた。どちらの名もエバシの名が由来である。

また、エバシは他のオリジナル人類イマナやヴィディエと組んで「プユマ族」「パゼッペ族」を生んでいる。プユマの名の由来はエバシとイマナの組み合わせであり、パゼッペの名の由来はエバシとヴィディエの組み合わせである。エバシ+イマナ=エバイマ=バイマ=プユマとなり、エバシ+ヴィディエ=バシヴィ=パゼッペとなる。アパッチ族、ヴェッダ族、ベトナム先住民に似た人々が混血することにより、台湾の先住民族は生まれたわけだ。近代に撮られた台湾先住民族の顔を見ると、確かに、東アジア人や東南アジア人というよりは、もっと異質な、アメリカ・インディアンぽい印象をもつ人も多い。

35万年前、古代の台湾に居住していたオリジナル人類エバシは、一番最初の人類エスが棲む日本列島に向かうことにした。まず、古代の九州に上陸したエバシは、阿蘇を統治していたエスに謁見し、伊勢、蝦夷を統治するエスにも謁見した。エバシは、蝦夷を治めていたエスと意気投合すると、当地は蝦夷（えぞ）の他に、蝦夷（えびす）とも呼ばれるようになった。えびすの名の由来はエバシである。エバシ=えびし=えびすとなる。

また当時、日本にはオリジナル人類ウェネ（アイヌ族）が最初の人類エスと共存する形で棲んでいた。エバシは、ウェネから「遠い昔（45万年前）に獣人の集団が未知の大陸を目指して北方に向かった」旨の話を伝えられた。すると、冒険の誘惑に知的好奇心を刺激されたエバシは、マヤ人に似た容貌を備えたエスに共同で北方を目指すことを打診し、獣人の集団を追い、蝦夷を発ってユーラシア大陸に進出し、更にそこから未知の大陸へと向かった。

当時、北極圏だったために凍りつき、陸続きとなっていたアリューシャン列島を通過し終えたエバシとエスの集団は、未知の大陸に到達し、そこで未知の人類と出会った。地球の王チュクウやクウォス、ヴィディエらの混血である彼ら獣人の集団は、UMAとして知られるビッグフットと全く同じ姿をしていたと考えられる。北アメリカに生息していた巨大哺乳類を狩り尽くしたこともあるが、同じ人間同士の争いを好まない獣人たちは、北アメリカを新参者であるエバシたちに

譲り渡し、古代アメリカで飼い慣らした牛、駱駝、豚、羊などの家畜を連れて、自分たちはアメリカを去り、モンゴルの地へと帰還した。

一方、エバシは「アパッチ族」となり、その後、彼らは残った一部の獣人と混合し、いわゆるアメリカ・インディアンを形成した。アパッチの由来はエバシである。アパッチ族らは、波状的に陸上生活を捨てて海に入り、永い年月を海中で生活するようになった。この時に、冷たい海流に影響されたのか、インディオの男性は「髭が生えない」という遺伝的特徴を得た。南北インディオの男性は、今でも全く髭が生えないことで知られている。この特徴は35万年前に遺伝子に刻まれたわけだ。また、アパッチ族らはエスを率いてユカタン半島にまで至り、獣人の血が濃いインディオは更にペルーの方にまで南下した。ユカタン半島に入植したアパッチ族は「太陽神アプチ」を生み、エスは「創造神イシュムカネー」「創造神イシュピアコック」などの神を古代ユカタン半島に生んだ。彼らは、人類史上最初にユカタン半島に足を踏み入れた人々である。

■原初の水アプスーの遺伝子～アッバース朝からハプスブルグ朝まで

1万3千年前、大地殻変動が起きると、蝦夷（えびす）は巨大地震と津波によって壊滅した故地を捨ててユーラシア大陸の内陸部、モンゴルに逃亡した。その後、1万5千年前に実施された「垂仁天皇の大移動時代」に参加すると、モンゴルから古代メソポタミアに移住した。蝦夷（えびす）は、この時代に「原初の水アプスー」を生んだが、アプスーは淡水の神として黒海やカスピ海を支配したと考えられる。アプスーの名の由来はえびす、またはエバシであることがわかる。えびす＝えびすー＝アプスーとなる。

BC327年頃、アレクサンドル大王の侵攻を機に、コラズムの住民によって「コラズム族の大移動時代」が組まれると、原初の水アプスーもこれに参加した。コラズムからアラビア半島南部に入植した彼らは「クライシュ族」を生んだ。クライシュの名の由来はコラズムである。コラズム＝コライズム＝コライズ＝クライシュとなる。その後、更に時代が下り、632年にアブー・バクルが初代カリフに即位し、「イスラム帝国」を築いた。イスラムの由来はイスラエルとソロモンの組み合わせと考えられる。イスラエル＋ソロモン＝イスロモ＝イスラムとなる。イスラムの名が何を意味しているかと言え、それはイスラム帝国が、古代モンゴルに築かれた「イスラエル王国ソロモン朝」の正統な後継者であるという示唆である。

AD750年には、アブル・アッバスがカリフに即位し、イスラム帝国に「アッバース朝」を開いている。アッバスの由来はアプスーである。アプスー＝アッブスー＝アッバスとなる。イスラム帝国は、アッバース朝の時代にバグダッドを築き、最盛期を迎えた。しかし、909年にファティマ朝が成立し、同時にウマイヤ朝がカリフを宣言したため、アッバス家はイスラム帝国を後に、新天地を求めてヨーロッパに移住した。この時に「ハプスブルグ家」が生まれた。ハプスブルグの名の由来はアッバスとブルグの組み合わせである。スペインでは、ハプスブルグは「アプスブルコ」と呼ばれている。

その後、ハプスブルグ家は地球の王チュクウの末裔であるマクシミリアン1世によって篡奪された。だが、それによりハプスブルグ家は以前よりもパワーアップされ、フェリペ2世、カール5世などの優れた皇帝が生まれた。一方、本家のハプスブルグは先祖が「アッバース朝」時代に治めていた土地、シリアに帰還した。オーストリア人の顔をした彼らは、アラビア人と混合し、サギー・アル＝アルスィーズイーを輩出した。彼は、ダマスカスで秘密結社「バアス党」を結成した。バアスの名の由来はアッバースである。サダム・フセインも母系ハプスブルグ家の系譜に属すると考えられる。残念ながら、欧米の大谷家（ジョージ・W・ブッシュ大統領とトニー・ブレア首相）の集中攻撃を受けたフセイン大統領は、「第一次世界大戦」と同様、欧米の大谷家（ウッドロー・ウィルソン大統領とロイド・ジョージ首相）が背後に控える連合軍に打ち取られてしまった。

■陸奥安倍氏の大航海時代～ムタパ王国からアヴィス朝まで

生まれた過程は不明だが、その名前から陸奥安倍氏はエバシの末裔であることがわかる。安倍の由来はエバシである。陸奥安倍氏はその素性や歴史も不明だが、878年に「夷浮の乱」を起こしたものの、大和朝廷に対して敗北したのを機に、陸奥安倍氏は東北地方を離れ、城氏を率いてインド洋を横断して東アフリカに位置するジンバブエに上陸した。この時、陸奥安倍氏は、「ムタパ」を称した。ムタパの名の由来は陸奥の安倍である。陸奥＋安倍＝ムツアベ＝ムツァペ＝ムタパとなる。

一方、ジンバブエには留まらずに南アフリカを周航し、大西洋に出て更に北上した陸奥安倍氏は、城氏と共にイスラム国家が統治していたイベリア半島に入植した。日本人の顔をした陸奥安倍氏は、現地人と混合して「アヴィス騎士団」を形成した。アヴィスの名の由来はエビスである。エビス＝エヴィス＝アヴィスとなる。また、城氏はイベリア半島をイスラム勢力から開放する「カスティーリャ王国」を築くことになる。カスティーリャの由来は城である。

AD1383年、アヴィス騎士団総長のジョアンが初代王に即位して「アヴィス朝ポルトガル王国」を創建した。しかし、ポルトガルにはタナトスの宗教シトー会やクリュニー会が巢食っていたため、アヴィス朝は彼らに引きずられて世界征服の尖兵と化してしまう。ポルトガル王国は、主にアフリカ、インド、東南アジア、東アジアを縄張りにしたが、アヴィス朝は悲しいことに、祖を同じくするムタパ王国とジンバブエの地で戦火を交えている。もちろん、人喰い人種クリュニー会の指揮下であった。

AD1430年、陸奥安倍氏の末裔オドウドウワが初代ムタパ王に即位し、ジンバブエに「ムタパ王国」を建設した。ムタパ王国は永い間、ポルトガルの大谷家に狙われ、その強大な征服本能に翻弄されたが、AD1629年にムタパ王国が滅亡すると、ムタパ人はジンバブエを去り、故地である日本帰還を目指した。ジンバブエ人の顔をしたムタパ人は、日本人と混合して「的場」の名を生んだ。的場の名の由来はムタパである。ムタパ＝ムタバ＝的場（まとば）となる。ムタ

パの系統からは特撮監督の的場徹、俳優的場浩司が輩出されている。また、アヴィス家からは、ドラマーとして世界的に著名なカーマイン・アピス（ヴァニラ・ファッジ）やヴィニー・アピス（ディオ）兄弟が生まれている。

■ピサの遺伝子～タナトスに乗っ取られたピサの悲劇

7万年前、「アルゴス号の大航海時代」によって英雄ヘラクレスが東南アジアに出現すると、ヘラクレスは現福建と台湾を支配していたアマゾン（ゲイの戦士）を反自然的と考え、彼らと戦った。その戦争を機に、台湾に棲んでいたバブサ族は台湾を離れ、オーストラリア大陸に入植した。バブサ族は、オケアーニス大洋の娘たちに属するテュケーと組んで「プシケ」を生んだ。バブサ+テュケー=ブサケー=プシケとなる。「神統記」では、プシケは女神として知られているが、神の名は常に優れた部族の名前である。プシケは、たくさんの優れた部族を生んだために女神とされているのだろう。

プシケは、オーストラリア北西部に「ピサ王国」を築いた。ピサの由来はバブサである。バブサ=バピサ=ピサとなる。古代のオーストラリア大陸には3つの王国が隣接していた。オーストラリア東部にはティルス王国（別名タルタロス）、南部にはアトランティス王国、そして北西部にピサ王国が存在していた。しかし、宇宙人（科学の種族チュクウのトバルカイン）が核攻撃でアトランティス王国を地上から葬り去り、次いで大地殻変動によって世界の平地が9日間海の底に沈むと、ピサ王国の人々はオーストラリア大陸を脱出し、古代ギリシアに落ち延びた。彼らはペロポネソス半島に新たにピサを築いた。

BC146年、ギリシアがローマ共和国の属国と化したのを機に、ピサの住人は、敵の本丸であるイタリア半島に入植した。彼らはイタリア半島に新たにピサを建設した。これが後にピサ共和国となる。ピサは、ジェノヴァ共和国、アマルフィ共和国、ヴェネツィア共和国と共に地中海を統べる海洋国家のひとつとして名を成したが、交易都市として発展を遂げ、中世には「ピサ共和国」を成し、小国ながらジェノヴァ共和国やヴェネツィア共和国と凌ぎを削った。しかし、残念ながらピサ共和国を掌握していたのはタナトスの一族に属するアブラハムの一族であった。

第二十七章 モディモの超古代史

■黒海、紅海に棲んでいた人魚～メディーナとメーティス

オリジナル人類モリモは、身長が140cm足らずであり、小さい人類に分類される。そのモリモは200万年前、現レソトから現ボツワナに移りオリジナル人類モディモを生んだ。モリモは半陸上生活にスイッチしていたが、モディモは陸上生活を放棄し、南アフリカの海に入ってビクトリア湖のディンカたちのように完全に水生生活に特化した生活を送っていた。永い水生生活により、彼らの頭部は小さくなり、鼻は高くなり、水中で推進力を得るために腕や脚が長くなり、総じて身長が180cmくらいと高くなった。また、目についてだが、モディモはディンカのように目が小さくなったり、シベリア人のように目が細くなる代わりに濃い眉毛と長い睫毛が備えられた。モディモの一族には陸上生活にスイッチし、イラン人、イラク人、アラビア人の先祖となった人々もいるが、ほとんどは人魚として海に生きた種族であり、メーティス、アドメテー、テテュス、ティアマトなど、多くの水に纏わる神々を生んでいる。容貌としては、彼らの姿はイラン人、イラク人、アラビア人に良く似ていたと考えられる。

200万年前当時から赤道直下に近い南アフリカの海で人魚として生きていた彼らは、波状的に東アフリカ海岸を北上し、100万年前までには紅海までをも生息圏としていた。そしておよそ30万年前までには地中海に入り、黒海にまで生息域を拡大した。黒海に暮らしたモディモは、そのまま陸上生活にスイッチすることもなく、人魚として暮らしたと考えられる。黒海の隣のカスピ海には、彼らの子孫と思しき人魚、半魚人の伝説が語り継がれている。

16世紀頃にはフランス人の医者がカスピ海に半魚人を目撃し、報告を著書にまとめている。この半魚人は昔から現地人に「ルナンシャア」と呼ばれているらしい。由来は不明だが、ルナンシャアの一番新しい発見報告は2003年である。漁船と同じ速度で泳ぐルナンシャアには嘴があると言われているが、実際には水中で推進力を得るために鼻が高く伸びている可能性がある。この半魚人の正体は古代人類モディモだと考えられる。

同じく30万年前くらいに、紅海に棲んでいた一部モディモが陸上生活にスイッチした。当時モディモは、まだ新緑眩しく、豊富な水源に満たされたアラビア半島南部に上陸し「メディーナ」を築いた。メディーナの由来はモディモである。モディモ＝モディノ＝メディーナとなる。アラビア人の顔をした人魚たちは陸上生活が板につくとメディーナを起点に永い年月を掛けて生活圏を拡大し、北アフリカからイランまでに拡散した。

モディモがメディーナを築いたのと時を同じくして、30万年前にヨーロッパやインドの小人族たちが一堂に会し「第2次キブウカの大移動時代」が実施された。人魚であるモディモもこれに

参加し、何年かかったか不明だが、ユーラシア大陸の海岸線をかすめながら河童の一族と共に東南アジアに到達した。当時の東南アジア～オーストラリアに至る地域ではたくさんの混血部族が生まれていたが、モディモも獣人クリュティオスと組んで「メーティス」を生み、イデュイア（オリジナル人類ヴィディエ）と組んで「アドメター」を生んでいる。モディモ＋クリュティオス＝モディオス＝メーティスとなり、イデュイア＋モディモ＝イデュモディ＝アドメターとなる。メーティスもアドメターも、オケアーニス大洋の娘たちに属している。

■薬草に精通したアマゾンの部族～マティス族

オーストラリアに死の種族タナトスが生まれると、これを嫌った多くの混血部族がオーストラリアを去った。この時から、混血部族の間では古代オーストラリア大陸は「ノドの地（タナトスの地）」と呼ばれた。メーティスも「オケアーニスの大移動時代」に参加して地中海に逃れた。彼らは黒海近辺に拠点を築き、国家を建設した。しかし、20万年前に「ガイアの大移動時代」によってオーストラリアから追放されたタナトスが連行役のガイアによって中央アジアに放置されると、タナトスは流刑地から自力で黒海にまで到来し、ウソと脅迫、欺瞞により、メーティスの国家を篡奪した。このタナトスによる統治時代、メーティスの国は「メドゥーサ」と呼ばれた。

メーティスの国の人々は、死の種族タナトスに生活を保障してもらうため、容易に悪に服従するような人々だった。このため、多くの善人が悔恨の念に蝕まれながら果てて行っただが、7万年前に「アルゴス号の大航海時代」に参加していた英雄ペルセウスが黒海沿岸の地を踏んだ。ペルセウスはメドゥーサの国を一瞥しただけで「不条理、且つ反自然的だ」と感じ、問答無用でタナトスを皆殺しにした。すると、タナトスに支配されていたメーティスとケルケイースの国の人々は歓喜し、英雄に心からの謝意を示した。この時のペルセウスによるタナトス虐殺の話は、怪物ゴルゴンと魔女メドゥーサ退治の話として語り継がれることになる。

「第2次アルゴス号の大航海時代」が始まると、メーティスはペルセウスに同行し、この航海に参加した。黒海からインド洋に辿り着き、これから太平洋を航行するという直前になり、一部メーティスは航海時代から離脱し、古代日本に移住することを決めた。彼らは先住者の河童の一族と意気投合し、混合して「メドチ」を生んだ。メドチの名の由来はメドゥーサである。メドゥーサ＝メドゥサ＝メドチとなる。メドチの名は、河童の別称のひとつとして知られている。一方、そのまま太平洋を横断し、古代ユカタン半島に到達したメーティスは、そこからユカタン半島を南下し、密林に覆われた古代アマゾン川流域に居を得た。アマゾン流域で水生生活を送りながら、永い年月の間に波状的に陸上生活にスイッチした彼らは「マティス族」となり、薬草のスペシャリストとなる。英語メディスン（薬）の由来はマティスの名前である。

■人魚の足跡Ⅰ～多摩からユナイタマ、アカマタ、クロマタまで

過程は不明だが、モディモはいつしか日本に棲み、多摩川流域に生息していたと考えられる。多摩の名にモディモの名残りが残されている。多摩の由来はモディモである。モディモ＝モティモ＝ティモ＝多摩となる。多摩川には河童一族も棲んでいた所以他们は共存していたのだろう。また、あまり知られていない地味な存在として「川男」なる妖怪が関東周辺に生息していることが伝えられている。川男は色黒で、180cmの上背があったとされているが、この身体的特徴はアラビア人などの身体的特徴にも合致する。川男の他に「川女」もいるといわれている。両者が川べりで語りあっているところを目撃した人もいとされているが、この妖怪の正体は男女のモディモだと考えられる。

モディモは多摩川流域だけでなく沖縄方面にも暮らしていた。現沖縄県宮古島市下地島に「ユナイタマ」の伝説が残されている。このユナイタマの由来は「ユナイ（海の）モディモ」だと考えられる。ユナイ＋モディモ＝ユナイディモ＝ユナイタマとなる。更に、八重島諸島には人魚神社があり、「アカマタ」「クロマタ」なる人魚が祀られている。アカマタ、クロマタの「マタ」の由来はモディモである。モディモ＝モディ＝モテ＝マタとなる。

八重山諸島の人魚神社の祭儀は、部外者の立ち入り禁止、写真撮影ご法度と、秘密結社並みの秘密主義に貫かれている。AD1968年には、進入禁止区域に部外者が立ち入ったことで殺人事件も起きているほどだ。現地人はアカマタ、クロマタの子孫、つまり、モディモの子孫なのかもしれない。そのため、現地人は先祖を守るために必死なのだろう。なかなか、このような人としての美德、崇高な発想は、資本主義社会では理解されないが。とにかく、強欲な白人列強が海を我が物顔で往来する以前の数百年前までくらいは、沖縄周辺の海では当たり前のようにモディモが顔を見せていたのかもしれない。その時代の記憶が人魚の子孫である現地人によって語り継がれ、人魚の伝説が現在に伝えられているのだろう。

人魚はもう日本近海には棲んでいないのだろうか？もし今でもまだ水生生活をしている人々がいるとしたら、彼らは今、どんな姿をしているだろう？時折、「半魚人が出た」などとオカルト界限で騒がれることがある。だが、その半魚人らは、もしかしたら水生人の成れの果てなのかもしれない。

例えば、怪談話で、ひとりで夜釣りしていたら海面から無数の手が出た、海面に浮かぶ無数の顔がこっちを見た。泳いでいたら足を引っ張られた、それで誰かが死んだ、などの話も良く聞かれる。だが、それらは水生人の仕業かもしれない。イルカのように完全な魚の姿をしていない彼らは、アザラシやペンギンのように、寝るときは陸上で寝る習慣があるのだろう。しかし、人がいては寝られない。ということで霊のふりをして、釣り人を脅かし、追い払っているのだ。

また、足を引っ張って脅すくらいはいいが、人を殺すとなると、これは尋常ではない。だが、東西本願寺の化学企業が垂れ流す農薬やゴルフ場に撒かれる除草剤に汚染された水によって、彼らの生活圏が破壊されているとしたら...、それが原因で顔が崩れた水生人を目撃して「霊だ！」とか、「半魚人だ！」と騒いでいるのかもしれない。つまり、足を掴んで溺れさせるなどの殺人行為は、彼らにとっては復讐なのだ。点が線で結ばれる試みがされなかつただけである。いろい

るな報告がある以上、「彼らを見ていないから彼らは存在しない」ということにはならない。

■人魚の足跡Ⅱ～オークニー諸島のあざらし人間

彼らがブリテン島周辺の海で暮らすようになった経緯は不明だが、ブリテン島近海に生息していたモディモは、ブリテン人に「マー」と呼ばれた。マーの由来はモディモである。モディモ＝モーディモ＝モー＝マーとなる。女はマーメイド、男はマーマンと呼ばれた。スコットランド北部の打ち身浮かぶオークランド諸島には人魚の話が多く語り伝えられているようだ。当地では人魚ではなく、ひれ人間、あざらし人間と呼ばれていた。「人魚と結婚した男～オークニー諸島民話集（トム・ミュア著）」にはいろいろな人魚との接近遭遇の様子がいくつかの事例として述べられている。

これらの民話の題材は恐らく、ほとんど全てが、ある程度の事実だったのではないかと考えられる。この本に集められた、オークニー諸島の人々とあざらし人間との交流のエピソードは時期としてはスコットランドやイングランドに国家が誕生する以前、つまり、アングル人、サクソン人、ジュート人が上陸する紀元前に起きたできごとではないかと考えられる。

あざらし人間の特徴として、数点のことが挙げられる。まず、「嵐の夜のあざらし男」のエピソードでは、あざらし人間の男性は色が浅黒く美しい顔立ちをしている。「あざらし女房」などのエピソードでは、あざらし人間は、金髪で白人というブリテン人と同じ特徴をもつ人々として描かれている。そして、あざらし人間の女性は、例えようもない美しい顔をしている。あとは、それぞれのエピソードで、独自の言葉を持つ。衣服を身につけていない。足がある。あざらし人間と結婚すると水かきを持った子供が生まれるなどの特徴が指摘されている。

筆者は、モディモはアラビア人と同じ姿をしていると考えているので色が浅黒いあざらし人間の男の正体は、モディモで間違いないと考えている。一方ではあざらし人間の中には、金髪の白人もいることが指摘されている。本の中では、あざらし人間の男は陸上の女性が好きで、いつも出会いの機会を狙っていると述べている。つまり、ブリテン人と同じ金髪で白人のあざらし人間は、あざらし人間と白い肌で金髪のブリテン人との混血で間違いない。ただ、アングロサクソン人が台頭してからは、ブリテン島では全くこの手の話は消滅したようだ。

■人魚の足跡Ⅲ～ヨーロッパの海人

オークニー諸島周辺に棲んでいた人魚は、どこか人気のないところへ移ったはずだが、ヨーロッパでは、時折、人魚のことが話題になった。例えば、中世のオランダで発生した不思議な話がある。AD1430年、オランダでひどい嵐により堤防が破壊された。翌日、乳絞りの娘が海に沈んだ牧場を通りかかると、水は引いていた。だが、泥の中に「海の女」が見えた。娘は、その女を街に連れていき、着物を着せて食物を与えた。人々は女に糸の紡ぎ方を教え、ハーレムに住ませた。女は数年生きていたが、言葉を習得できず、水に惹かれる本能を持ち続けたという。

人魚とはいえ、本物の人魚はおとぎ話の人魚とは異なり、ちゃんと足があり、人類の生活にも順応できたようだ。

また、近代にフランスで捕獲された水生人の女性は、大きな水槽に飼われていて、食事、水中での生活、特に性器が非常に良く観察され、詳細に報告されている。しかし、女の下半身は鱗で覆われた魚の尻尾だったという。尻尾以外の観察は詳細であるにもかかわらず、尻尾の部分はとってつけたようであるため、後世になって付け加えられた可能性がある。大部分のあざらし人間たちは、中世以降、どこか遠くへ泳ぎ去り、誰もいない場所で人知れず暮らしているのだろうか。

■原初の水ティアマトの遺伝子～大和国と山田氏

オリジナル人類ヴィディエとモディモの合体により、アドメテーが生まれたが、その兄弟とも言えるのが「ティアマト」である。ティアマトの名の由来はアドメテーと同じく、ヴィディエとモディモの組み合わせである。ヴィディエ+モディモ=ディエモディ=ティアマトとなる。メソポタミアで原初の水として知られる龍神ティアマトは、じつは古代日本に生まれた。その証拠がヤマトの名である。ヤマトの由来はティアマトなのだ。超古代のヤマトに住んでいた大和人はモンゴロイドではなく、ヴェッダ族（ヴィディエ）とアラビア人（モディモ）の混血のような顔をしていただろう。

大和人はモディモの子孫であるため、古代の大阪湾で半陸上、半水生の生活を送っていた可能性がある。やがて、オケアーニス大洋の娘たちに属する兄弟のアドメテーがオーストラリアからヤマトを訪れると、ティアマトはアドメテーと組み、「大綿津見神（おおわたつみ）」を生んだ。大山津見神の由来はアドメテーとティアマトの組み合わせである。アドメテー+ティアマト=アドティアマ=アドチャマ=ワタツミとなる。アドメテーの他にもオケアーノス、エウリュノメー、クリュメネー、テテュスなどがヤマトを訪れ、ティアマトと組んで「大山津見神（おおやまつみ）」「宇迦之御魂神（うかのみたま）」「豊玉毘売命（とよたまひめ）」「玉依毘売命（たまよりひめ）」など、国津神に分類される神々を生んだ。ティアマト直系の子孫である「山田氏」には、ヴェッダ族とアラビア人を合わせた遺伝子を継承している人も多く見られる。

神武天皇が始祖となった天皇家は、1万3千年前の古代モンゴルに生まれた。大地殻変動が発生した時、巨大な地震と津波で壊滅した故地を捨てることを決めたティアマトらは、ヤマトを離れて古代のモンゴルに移り住んだ。他にも、台湾（高天原）や東南アジア（エティオピア王国）からも大勢の難民がモンゴルに集合していた。この神々の種族の難民たちが天皇家を育んだ。ヤマトから来たティアマトは、他の神々の種族と組んで「大日本彦（オオヤマトヒコ）」「大日本根子彦（オオヤマトネコヒコ）」「稚日本根子彦（ワカヤマトネコヒコ）」などの天皇を生んだ。御名に加えられたヤマトの名が、ティアマトの子の証である。

大日本彦は「第四代イ徳天皇」になり、大日本根子彦は「第七代孝霊天皇」「第八代孝元天皇」

になり、稚日本根子彦は「第九代開化天皇」になった。もちろん、これらの天皇は日本人の姿ではなく、身長3mを誇るビッグフットのような獣人、身長140cmの小人族、メラネシア人、東南アジア人、台湾先住民族、シベリア人など、さまざまな姿をしていた。天皇家が統治した国は、大地殻変動によって亡命した難民が作った政権であるためか、国の名はなかった。

■水の女神テテュスの遺伝子～ティタン神族と製鉄技術

水の女神とされるテテュスは、台湾に移住した原初の水ティアマトが獣人クリュティオスと組むことで生まれた。ティアマト＋クリュティオス＝ティティオス＝テテュスとなる。7万年前、「第1次ウラヌスの大移動時代」に参加してオーストラリアから地中海に入植したテテュスは、ウラヌスと組んで「ティタン神族」を生んだ。ティタンの名の由来はテテュスとウラヌスの組み合わせである。テテュス＋ウラヌス＝テテュヌス＝ティタヌス＝ティタンとなる。

7万年前に生まれたティタン神族は、「神統記」に記された神々の種族だ。だが、ウラヌスがクロノスの計略によって古代ギリシアを追放されると、死の種族タナトスの部族であるクロノスのウソと欺瞞によって悪の配下に堕ちていた。これに対して、大量の弱い者を操り、少数派の強い敵を数で圧倒し、倒してきた魔神クロノスに挑戦した全能神ゼウスは、クロノスに操られ、善悪の判断を喪失したティタン神族とギガースの軍団に勝利し、3万年ぶりに彼らをクロノスの魔手から解放した。この戦いは、神統記に記されている「ティタノマキア」と「ギガントマキア」である。

解放されたティタン神族は古代ギリシアを離れて故地であるオーストラリアに帰還したが、彼らは、この時代に製鉄の方法を編み出した。人類で一番最初に製鉄技術を開発したのはティタン神族であった。およそ、4万年前のことである。当時、ティタン神族はアボリジニと同じ姿をしていたと考えられるが、アボリジニの民族楽器ディジュリドゥーは製鉄の時代の名残りであり、原型はふいごだった可能性がある。しかし残念なことに、アトランティス王国（オーストラリア南部）の核攻撃と、大地殻変動の際に生活圏が9日間海の底に沈んだため、製鉄の痕跡は洗い流された。

1万3千年前、大地殻変動によって生活圏が海の底に沈んだため、「デウカリオンの大航海時代」に参加して古代メソポタミアに流れ着いたティタン神族は、古代エジプトの地に「叡智の神トート」などの神を生んでいる。彼らは、悪に利用されることを恐れ、製鉄の知識を温存し、来るべき時が来たなら製鉄の知識を解禁しようと考えていた。その時が、ハッティ人との出会いの時だった。ハッティ人（ヤペテ）は「第1次北極海ルート時代」に参加し、オビ河流域に入植したあと、南下して黒海方面に歩みを進め、アナトリア半島にまで辿り着いた人々である。ティタン神族はハッティ人と組んで「ヒッタイト帝国」を築いた。ヒッタイトの名の由来はハッティとティタンの組み合わせである。ハッティ＋ティタン＝ハッティタ＝ヒッタイトとなる。ティタン神族はこの時に初めて製鉄の知識を解禁し、鉄製の武器具などを製造した。これにより、ヒッ

タイト帝国はエジプト王国を向こうに回し、オリエント有数の古代国家として君臨した。謎の古代民族ヒッタイト人の正体は、ギリシア神話のティタン神族の末裔であった。

BC 1200年、死の種族タナトスの一部族であるデニエン人とシェルデン人が海の民（悪）としてヒッタイト帝国を滅ぼすと、ヒッタイト人はトウルシア人ら海の民（善）の助力により、古代のイランに亡命し、アーリア人の一部族パルシュ族と組んで「ベーシュタード王国」を築いた。ベーシュタードの由来はパルシュとティタンの組み合わせである。パルシュ+ティタン=パルシュティタ=ベーシュタードとなる。イランに存在したとされる幻の王国ベーシュタードは、実際には首都が現オーストリアにあった。その名残りがハルシュタットの名前である。永い年月の間に多少呼び方に変遷が加えられているが、ハルシュタットとベーシュタードの名は同じ名前である。ベーシュタード王国は、現オーストリアから旧ヒッタイト帝国を含む、イランに至るまでの広範な地域を統治していた巨大な国家だったと考えられる。ハルシュタットは岩塩の採掘で栄えたが、採掘された岩塩は、ヨーロッパからイランに至るベーシュタード国内で消費されたのだろう。

■タタール人の歴史～多田羅製鉄と鳥取と豊田と伊達

その後、同盟者パルシュ族の名前を冠したペルシア帝国の時代、ティタン神族はイランに留まっていたが、BC 330年にペルシア帝国が滅ぶと、ティタン神族はモンゴルに落ち延び、アーリア人と組んで「タタール人」を称した。タタールの由来はティタンとアーリア（アラン人）の組み合わせである。ティタン+アーリア=ティターリア=タタールとなる。ヒッタイト帝国以来、製鉄の知識は流出してしまい、タタール自身は製鉄に纏わる知識を封印していたが、彼らが日本に移住した際、ティタン神族の製鉄法は「多田羅製鉄」として甦った。多田羅の由来はタタールである。インドの財閥「タタ」もタタールの子孫であるが、名は体を現すではないが、彼らも製鉄業や自動車会社を運営している点は興味深い。

ティタン神族は、数回に渡って波状的に日本に移住している。AD 319年、鮮卑の消滅を機にタタールが日本に上陸し、現鳥取県に入植した。「鳥取」の名の由来はタタールである。タタール=タッタール=鳥取となる。これが第一回の移住だ。この時に多田羅製鉄が伝えられた可能性がある。更に、ティタン神族の末裔テウトニ族が日本に移住し、「豊田氏」を生んだ。テウトニ=テウト=テウタ=豊田となる。これが第二回の移住。そして、サーサーン朝が滅んだ時にイランに残っていたティタン神族がサーサーン人と共に日本に移住した。この時に「多田氏」が生まれた。多田氏は「多田神社」を建立している。これが第三回の移住である。

最後に、遼が滅んだ時にタタールが日本に移住し「伊達氏」を誕生させた。伊達の名の由来はタタール、或いはティタンである。タタール=ダタール=伊達となる。当初、タタール人は「下野中村氏」を称した。その後、「常陸入道念西」と呼ばれた中村念西が「伊達」を称した。中村の名の由来は女真である。女真（ジュシャン）=チューサン=チューソン（中村）となる。ただ

、伊達氏の系統は、伊達政宗のときに帝王の種族に篡奪されているため、現在の伊達氏はタタール人の末裔とは呼べない（詳細は、別著「ダヴィデの一族」を参照していただきたい）。

第二十九章 ディンカの超古代史

■一番新しい人類ディンカ～背の高い北欧系白人の正体

およそ50万年前、多くのオリジナル人類はとっくに故郷であるビクトリア湖を去り、更にアフリカ大陸を離れ、新天地を目指して世界中に散っていた。しかし、身体的特徴が異なるものの小人族の他に水中生活に特化した一族がまだビクトリア湖に暮らしていた。ビクトリア湖の沿岸部には最大で6mもの体長を誇る巨大なクロコダイルが生息している。そのため、この一族は、ビクトリア湖のほぼ中心に暮らしていた。水生生活を送っていた河童の一族でさえ、寝る時は岸に上がって寝ていたが、この一族は永い年月を水中で暮らした。それが要因となり、彼らの腕、脚、指は長くなり、身長は2m前後にまで伸びた。このような身体的な変化は、水中で推進力を得ることが要因であった。

水を掻く腕、水をける脚が長ければ長いほど水中で推進力を得るのだ。また、この一族は長い水生生活により、人類の中でも洗練された端正で整った顔を手に入れた。小鼻は小さく、程よい高さで、目は小さく、唇も薄く、頭部は小さく、丸くきれいな後頭部を持つ。古いオリジナル人類たちの顔は一様に鼻が大きく、唇は厚く、彫りも深い。語弊を承知で述べるが、ともすると原始的な印象を受ける。だが、ディンカからの顔は非常に今日的だ。

彼らの子孫は数十万年に渡り、ビクトリア湖を中心に生活圏を近隣に、そして波状的に拡大して行った。ディンカ、シルック、ハダメ、イサック、マサイらは、この時にケニアやソマリアに移った彼らの子孫である。彼らは現在でもアフリカの少数部族として知られている。だが、これらの民族はただの少数民族ではない。彼らは、エス、キブウカ、チュクウ、クウォス、ヴィディエらと同じオリジナル人類であり、一番最後に生まれた最新的人类となる。

ディンカは、遠い過去に既にビクトリア湖を離れ、近代にはナイル上流域（白ナイル）に暮らしていた。しかし、この2mの身長を持つ、端正な顔の人類も、一部は母なるアフリカを離れて新天地を目指し、超古代の時代に大なる冒険の旅に出ていた。40万年前、背の高い黒人たちが一同に介し「ディンカの大移動時代」が実施された。この大移動時代の目的地は、地中海であった。

当時の北極圏であったヨーロッパ全土に暮らすことで、黒人だったディンカからは永い年月を経て金髪・碧眼の白人となった。彼らは、北フランス、オランダ、デンマークなどに住む背の高い、いわゆる北欧系の白人の祖である。著名人でいえば、クリント・イーストウッド（俳優・監督）、ルトガー・ハウアー（俳優）、アーノルド・シュワルツネッガー（俳優）、セーム・シュルト（格闘家）などがこの系統に含まれる。ディンカからは、シルックと共に「タンジール」「サルディーニャ」などの地名を残している。ディンカ+シルック=ディンシル=ディンシール=タンジールとなり、シルック+ディンカ=シルディン=シルディンニャ=サルディーニャとなる。

多くの有名なヨーロッパの地名は、この時、背の高い黒人たちが地中海に入植した40万年前に生まれたものだ。

彼らが地中海に到着した当時、地中海には既にオリジナル人類キブウカ、カゾオバなどの小人族が暮らしていたが、地中海に到着した背の高い黒人たちの集団は、彼らと共存した。ヨーロッパでは妖精の存在が強く信じられているが、これは背の高い黒人だった自分たちの先祖が、先住民族の小人族たちと共存していた時代の、記憶のフラッシュバックかもしれない。

■金髪・碧眼の白人の正体は黒人？

人類の歴史が大きく動いた30万年前には、ヨーロッパに住んでいた背の高い金髪・碧眼の白人たちは「第2次ディンカの大移動時代」を実施し、大挙して東南アジアに入植した。彼らの訪問の名残りは、褐色の肌ながら、金髪・碧眼の特徴を持つ人が多く住むソロモン諸島に見つけることができる。ソロモン諸島の人々の肌色の場合、黒い肌が北極圏で一度白く変わったが、東南アジアに入植したことで、再度褐色に変わったものだ。しかし、金髪や碧眼の特徴は残っている。この新しい人類は、200万年前、50万年前から東南アジアに住んでいた古い人類と交流しながら、交配を繰り返し、古代のオーストラリアにて多くの混血部族を生んだ。ディンカはオケアーニス河川の娘に属する「グレニコス」を生んでいるが、グレニコスは日本に赴いて最初的人类エスと共に創造神「伊邪那岐」を生み、八代湾沿岸部に伝説の「葦原中津国」を築いている。葦原中津国の住人は、沖縄人の姿をした人々と金髪・碧眼の背の高い白人たち、そして、一部にソロモン諸島の人々が共存していたと考えられる。

古代オーストラリアで優れた混血部族が多く生まれる中、しかし、できそこないが集合し、ニュクスに代表される「反自然の種族」や死の種族タナトスが生まれた。彼らの存在を嫌ったディンカを含む大勢の混血人類は「オケアーニスの大移動時代」を実施し、オーストラリアを離れて地中海に移住している。キュクロプス、ヘカトンケイル、オケアーニス大洋の娘たちや河川の娘たちといった混血人類は、古代ギリシアに入植した。ディンカも古代ギリシアに入植し、オケアーニス大洋の娘たちに属するペイトーと組み、「守護蛇ピュトン」を生んだ。ペイトー+ディンカ=ペイディン=ペイティン=ピュトンとなる。守護蛇ピュトンは、オリジナル人類トレとペイトーが築いた「聖地デルポイ」の守護神として祀られた。

■天空神テングリの歴史～チェケル人から丁零まで

7万年前、「第1次アルゴス号の大航海時代」に参加して古代ギリシアを離れたディンカは、新しいオリジナル人類ムルングと共に古代のミャンマーに入植した。この時に、ミャンマーの少数民族として知られる「トゥングル族」が生まれた。トゥングルの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=ディンカル=トゥングルとなる。更に、ミャンマーから台湾（高天原）に移ったトゥングル族は、現台湾の先住民族として知られ

る「ケタガラン族」「クーロン族」を生んでいる。この古代台湾の地でトゥングル族は、同じく台湾の先住民族として知られるセデック族に出会い、意気投合して共同で東アジアを北上する旅に出ている。

この旅によって、台湾から黒龍江付近に入植したトゥングル族は、当地に「犬戒（キロン）」を生んだ。一方、セデック族は古代ツングースにチュクチ族を生んだが、古代ツングースの王として黒龍江を支配したチュクチ族は「神統記」に於いて「冥府の川ステュクス」と呼ばれ、犬戒（キロン）は「渡し守カロン」と呼ばれた。また、トゥングル族はモンゴルの最高神として知られる「テングリ」を生んだ。テングリの名の由来はトゥングルだが、同じディンカとムルングのコンビにより、中世にはモンゴルの遊牧民族として知られる「丁零（ディングリング）」も生まれている。最高神テングリもカロンの渡し守もトゥングル族も、丁零（ディングリング）も名前は異なれど、同じ人々である。

また、一部シベリア人や、満州人、朝鮮人には非常に背が高い人を見つけることがあるが、これは、背の高いディンカがもたらした遺伝的特徴である。アフリカのイチ少数民族として知られているディンカ族が、じつは古代にシベリアまで足を運んでいた証である。水生生活をしていたシベリア人は、冷たい海水に適応するよう、身体全ての部位が縮んだのだが、7万年前に背の高いディンカ（トゥングル族）が古代ツングースを訪れたことにより、身長が2 mを誇るディンカの血がシベリア人の身体に組み込まれたのだ。また、稀に金髪・碧眼の特徴を持つモンゴル人を見つけることがある。彼らの顔を一見すると、非常に古い人類であるという印象を受けるが、彼らは7万年前にセデック族と共に黒龍江流域に入植したトゥングル族の面影を残しているのかもしれない。

BC 19世紀頃になると、チュクチ族と最高神テングリが合体することで海の民として知られる「チェケル人」が生まれた。チュクチ+テングリ=チュグリ=チェケルとなる。古代の地中海を我が物顔で荒らしたとされる海の民は、名前以外は詳細が不明である。彼らは正体不明だが、正確に名前をトラッキングすれば、全ての謎は解決することができる。詳しくは別著「異なる人類の歴史」などを参考にしていきたい。

海の民チェケル人の話に戻るが、彼らは巨石建造の種族マルドゥクと連合し、ローマ共和国のライバルとして、近隣諸国から畏怖の念と羨望のまなざしを集めた古代国家「カルタゴ」を古代チュニジアに築いた。カルタゴの由来はチェケルとマルドゥクの組み合わせである。チェケル+マルドゥク=ケルドゥク=カルタゴとなる。巨石建造の種族マルドゥクはもともとはクウォスであり、ダーナ神族に要請されて古代ヨーロッパにメンヒルやストーンサークルを、そして一方で、自身のために独自にドルメンを築いていた種族だ。興味深いことに、カルタゴを築いたマルドゥクは、後に高車（ガオチェ）として遊牧民族としてモンゴルに登場するが、カルタゴを共同で築いたチェケル人も丁零として同じ時期にモンゴルに出現している。

第三十四章 ンジニの超古代史

■森林時代の古代アラビア半島と幻の国々～千夜一夜の王族シンバッド

最初の人類エスを筆頭に、数々のオリジナル人類を生んだ人類の歴史は、既に396万年に達していた。だが、4万年前にまた新たなオリジナル人類が生まれた。4万年前といえば、後にUFOを発明する混血部族トバルカインが生まれた時代である。現カメルーンの海岸に水生人として暮らしていた人々は自らを「ンジニ」と称した。ンジニは、現セネガル人に似た姿をしていたと考えられる。そして、ディンカの例を見ても分かるように、水生生活が永ければ永いほど、背は高くなり、顔も凹凸がなくなり、洗練されていく。というわけで、4万年前まで水生生活に特化していたオリジナル人類ンジニも、水中で推進力を得るために頭部は小さくなり、腕、脚、指は長く伸び、総じて身長は2mほどになった。現在活躍しているアフリカ系スーパーモデルは、ほとんどがセネガル人ではないかと考えられる。

4万年前に生まれたンジニは、現カメルーン辺りから北東方面に向かって波状的に生活圏を広げ、「シナイ半島」「シンド」の地名に足跡を残している。シナイとシンドの名の由来はンジニとヴィディエの組み合わせである。シンドに至ったンジニは、セイロン島に棲んでいたオリジナル人類ヴィディエ（ヴェッダ族）と出会い、意気投合したようだ。ンジニ+ヴィディエ=ジニエ=シナイとなり、ンジニ+ヴィディエ=ジニディ=シンドとなる。一部の背の高いインド人やアラビア人の容貌は、この時のンジニ（セネガル人）とヴィディエ（ヴェッダ族）の合体により生まれたと考えられる。

シナイ半島やシンドには、このンジニとヴェッダ族によって知られざる王国が築かれていた可能性がある。その幻の王国の歴史が「千夜一夜物語（アラビアンナイト）」にまとめられている。主人公のシンバッドは、ンジニとヴェッダ族の合体によって生まれた王族に属していたと考えられる。だが、千夜一夜物語の主人公はひとりではない。シンバッド王国には何人もの偉大な王が君臨したが、その何人もの帝王の人生が、ひとりのシンバッドの物語として語られている。アラビアンナイトは、シナイとシンドを治めたスーパーモデルのような美しい王族が認（したた）めた歴史書である。

因みに、ランプの精として有名な「ジニー」の名前の由来も分かりやすいことに、ンジニである。ランプの精は魔法使いであるが、これは、ンジニが善神デーヴァ（科学の種族トバルカイン）と交流があり、友人として最先端の科学を享受していたことを意味する。同じ家族であるシンバッドの王族が危機に瀕したとき、宇宙人（科学の種族トバルカイン）の仲間となったンジニ（ジニー）が、彼ら王族を助けていたことを示している。

マハーバーラタ戦争とラーマヤナ戦争が起きるBC11世紀頃までは、アラビア半島は新緑に恵まれた肥沃な土地であり、いくつもの古代王国が築かれていた。イタリア半島に存在したと考えられているローマ王国、エトルリア王国、アルバ・ロンガ王国や、古代ギリシアに存在したと考えられているアテナイ王国、マガン王国（ミケーネ文明）はアラビア半島が発祥の地である。これらのアラビア諸王国は、シナイ半島やシンドに挟まれており、当然のようにシンバッド王国とも親交を暖めていた。ただ、エトルリア王国は大宛を拠点にしたタナトス（預言者ナタン）の国、ミディアン王国の植民地として形成された。タナトスに指揮されたエトルリア人はローマ王国に侵攻し、またアテナイ王国の王座も奪い、アラビア半島の統一を目論んでいた。

ただ、シナイ半島には巨大なクレーターが認められているように、シンバッドの王国も他の古代王国の例に漏れず、醜いタナトスの一族（魔神アスラ、夜叉、羅刹）によって篡奪された。アラビア半島をほぼ統一したタナトスの一族は、「アマルナ宗教改革」の時に古代エジプト王国にも手を伸ばしたが、当然のようにシンバッドの王国をも毒牙にかけた。美しい王族は、だが、王国のインフラを掌握した死の種族タナトスの前では無力であり、生活の保障を求めるしか生きる術がなかった。そして、生活の保障の見返りとして王族が人民に率先して悪に従った。そのため、激怒した善神デーヴァ（科学の種族トバルカイン）の怒りによってアラビア半島の全滅（ラーマヤナ戦争）と時を同じくし、シナイ半島は核攻撃されたようだ。核攻撃の目標に設定された点を鑑みると、シナイ半島はシンバッドの王国の首都があった可能性もある。その名前から紐解くと、ランプの精ジニーはシナイに棲んでいたかもしれないし。とにかく、幻のシンバッドの王国は巨大な核爆発によって滅亡し、古代王国の栄光と栄華は一瞬で無表情な砂や礫と化した。

■シュメールの月の神シンと西域の大月氏

建設された時期は不明だが、シュメール人の都市国家として知られている「イシン」もオリジナル人類ヴィディエとンジニの名前が由来である。ヴィディエ+ンジニ=イエジニ=イシンとなる。一方、オリジナル人類ンジニは単独でシュメールに「月の神シン」を生んだ。シンの由来もンジニである。ンジニ=ジニ=シンとなる。BC5千年頃にバベルの塔が破壊されると、「第1次北極海ルート」の時代が実施された。北極海ルートとは、メソポタミアを出発し、地中海を出て北上し、スカンジナビア半島を更に周航して北極海を東方に進んだ大航海時代のことである。この航海は、短い夏の間にしか実行できないため、太平洋に出るまで非常に年月がかかった航海であるが、これに都市国家イシンの人々も参加した。

北極海を東方に進んだイシンの人々は、シベリアの大河レナ河流域に入植した。その後、イシンの人々はレナ河流域を離れて波状的に南下し、数百年かけて現モンゴルとタリムの周辺に「月氏」を生んだ。中国の古文書では月氏と呼ばれたが、彼らは「月の神シン」の名を採って「シン」を自称していた可能性が高い。古代中国人に月氏と呼ばれていたのも、月の神シンに由来しているものである。後の、大月氏時代に亀慈（クチャ）と連合して生まれた「クシャーナ」などの名から推測しても、月氏の本名は「シン（シナ）」であると解釈できる。

クシャーナ朝の時代には、月氏は亀慈（クチャ）の人々と合体することで「クシャーナ」を生んだ。クシャーナの名の由来は亀慈（クチャ）と月氏（シナ）の組み合わせである。クチャ＋シナ＝クチャナ＝クシャーナとなる。クシャーナ朝はパンジャブに拠点を築いたが、途中で王位をドルイド祭司に篡奪され、仏教を武器に近隣諸国に侵略戦争を仕掛けるようになる。その後、5世紀頃にクシャーナ朝が滅ぶと、月氏はパンジャブから日本にまで辿り着き、倭寇にも参加する「草野氏」を生んでいる。草野の名の由来はクシャーナである。クシャーナ＝クシャーノ＝草野となる。他にも草薙氏や楠木氏の名が生まれている。草薙や楠木の名の由来はクシャーナキ（クシャーナ人）である。

■月の神シンの遺伝子Ⅰ～晋と秦

BC1027年に「マハーバーラタ戦争」が終了すると、シンドの人々は核兵器によって荒廃した故地を捨てて新天地を求め、東方を目指した。シンドの人々は古代中原に入植すると「晋（ジン）」を称した。晋の名の由来はシンドである。春秋戦国時代の晋は、同族である秦が活躍を始めるBC256年頃まで、古代中原の盟主として他の小国家、燕、斉、楚、韓、魏、趙、東周などを自身の影響下に置いていた。その後、秦が中国統一を果たし、次に漢が中国を治めると、晋からは刑（ジン）、金（ジン）などの名が生まれた。つまり同じ「金」でも、中国の金氏（ジン）と朝鮮の金氏（キム）は由来が異なる。呉と魏が滅んでAD3世紀に「大和人の大航海時代」が始まると、この航海時代に参加した中国人（刑氏、金氏）はブリテン島に入植した。刑氏からは「リンチ」、金氏からは「ゴールド（グールド、ゴールドマンなど）」の名が生まれた。

また、BC7世紀に起きた「フェニキア人の大航海時代」に参加したイシンの人々は、中国に移住して「秦（シン）」を誕生させている。だが、BC256年頃、「秦」は地球の王チュクウの末裔であるダヴィデの一族によって篡奪された。秦は、帝王の血によって更にパワーアップすることにより、中国統一を果たすことができた。これ以降、秦はダヴィデの一族に属した（詳しくは別著「ダヴィデの一族」を参照いただきたい）。

■ソマリアに生まれた秦氏（はた）の遺伝子～クヌード大王からジョン・F・ケネディ元大統領まで

秦氏（はた）は秦（シン）の末裔だが、成立過程は非常に複雑である。まず、秦が滅ぶと、始皇帝の一族は中国を離れてエジプト王国に帰還した（なぜなら始皇帝はプトレマイオス4世だったからだ。詳しくは別著「ダヴィデの一族」を参照のほど）。オリジナル人類ンジニの血を継ぐ真の「秦」の系統は、ダヴィデの一族とは袂を分かち、中国を離れてソマリアに移住した（ソマリアには韓、魯、衛の人々が入植し、ラハンウェイン族を形成していた）。

秦は、ソマリアでハダメ族（オリジナル人類ハダメ）に出会い、意気投合して合体部族を形成

した。ここに「秦氏（はた）」が生まれた。秦（シン）の漢字表記はンジニが引き継ぎ、漢字表記の「秦」をハダメに由来する「ハタ」と発音することで秦氏（はた）が生まれた。その後、ソマリアを発った秦氏は、朝鮮半島に入植して「三韓」の仲間に入った。秦韓、弁韓、馬韓の3国を併せて三韓と呼んでいたのだが、そのうちのひとつ秦韓（辰韓）はソマリアから来た秦氏（はた）が築いた国である。この朝鮮半島に居住していた秦韓が、後に渡来人として日本に渡ってきたことで、秦氏（はた）は古代日本で技術者の集団として知られるようになるのだが、彼らは分家である。

秦の本体は、数年間かけて太平洋を渡り、古代のメキシコに入植した。彼らはメキシコの地に「グアナファト」を築いた。グアナファトの由来は「秦」と「ハダメ」の組み合わせである。キン（シン）＋ハダメ＝キナハダ＝グアナファトとなる。当時、ユカタン半島とアイルランドをつなぐ航路があったが、グアナファトの人々はアイルランドとユカタン半島を往来し、アイルランドに「コナート」を築いた。コナートの由来はグアナファトである。グアナファト＝ガナハト＝ガナート＝コナートとなる。

永い年月の間、コナート人はアイルランド島とユカタン半島を自在に往来することで航行技術、船舶の製造技術を洗練させた。これにより、コナート人からはクヌート大王が輩出されることになる。クヌートの由来はコナートである。AD1028年、クヌード1世はデンマーク、ノルウェー、ブリテン島に至る地域を掌握することで、クヌード大王の王国は北海帝国と呼ばれた。このクヌードの一族から「ケネディ」の名が生まれることになる。クヌード＝クヌーデ＝ケネディとなる。因みに、ジョン・F・ケネディ大統領を生んだ「ケネディ家」は、じつは秦氏の系統ではなく、ダヴィデの一族に属している。ダヴィデの一族がケネディ家に参入したことでケネディ家はパワーアップし、ジョン・F・ケネディに代表されるケネディ兄弟と一族が生まれたのだ。

■アテネの歴史～アザニアー海賊、エッセネ派から阿史那氏まで

イシンの人々は一部がギリシアに渡り、都市国家アテネに入植して古代アラビアに存在したアテナイ王国やアデンの人々と共存した。アテネ人は、スパルタ人と共に好戦的な人々として知られ、常に戦争に明け暮れていた。「第一次神聖戦争」「サラミスの海戦」「第一次ペロポネソス戦争」「第二次神聖戦争」「第二次ペロポネソス戦争」「シチリア戦争」「コリントス戦争」「同盟市戦争」「クレモニデス戦争」など、ほとんど常に戦闘を繰り返していた。だがBC267年、マケドニア人の台頭により、アテネ人はギリシアを離れることを決意した。

「クレモニデス戦争」を機に、アテネ人はアテナイ人、アデン人、イシン人に分裂して四散した。まだ文明の痕跡がない頃のスワヒリ文化圏に侵入したイシン人は自身を「アザニアー」と呼んだ。アザニアーの名の由来は、イシンとアテナイの組み合わせである。イシン＋アテナイ＝イシナイ＝イシニヤイ＝アザニアーとなる。好戦的なアテネ人らしく、アザニアー人は凶暴な海賊として鳴らした。

そしてBC 2世紀頃、スワヒリを離れたアザニアー海賊は、ローマ占領下のイスラエルの地に入植した。彼らは、現地人と混合して「エッセネ派」を結成する。エッセネの名の由来はアザニアーである。アザニアー＝アッサニア＝エッセネとなる。BC 143年、ギリシアがローマの属領と化すと、エッセネ派は、イスラエルに亡命してきたアテネ人を迎えた。イエスの時代、エッセネ派は、パリサイ派、サドカイ派と共にユダヤ教の主な派閥の中心的存在であった。

AD 44年、ユダヤ王国がローマ属州に併合されると、エッセネ派はイスラエルを脱出した。いわゆるディアスポラだが、彼らは遠く朝鮮半島に移住した。この時に「昔氏（イエツ）」が生まれた。「昔（イエツ）」の名の由来はエッセネである。エッセネ＝イエッセネ＝イエツ（昔）となる。昔氏は昔氏王朝（新羅）を開いた。この王朝はAD 356年まで続いた。その後、昔氏王朝が滅ぶと、それを機に昔氏は中央アジアに入植した。昔氏は「阿史那氏」を称し、上流部に進出してチュルク族を支配下に置いた。阿史那の名の由来はアザニアー、或いはエッセネである。アザニアー＝アサナ＝阿史那（あしな）となる。これが4世紀頃のことである。

そしてAD 552年、チュルク族を指揮下に置いた阿史那氏の土門が、柔然を撃破して伊利可汗を称して初代可汗に即位した。この時に「突厥帝国」が生まれた。隣国の「唐」はアテナイ人（唐氏）が築いた国家であるため、古代ギリシア時代を切磋琢磨し生き抜いた同盟者同士ということで、突厥帝国は異国の地で改めて唐と連合を組んだ。中央アジアを治める突厥帝国との連合により、唐は当時の時代に於いてビザンツ帝国、イスラム帝国に並ぶ巨大帝国として古代世界にその名を知らしめた。

しかし、AD 744年に東突厥帝国が滅ぶと、阿史那氏は中央アジアを発った。一部は西方に向かってハザール帝国に侵入し、一部は東方に向かって日本に渡り、入植した。ハザール帝国に侵入した阿史那氏は「アイゼン」を称し、ハザール帝国が滅んだ後にはアシュケナージとして東欧に移り住んだ。ハードロックバンドKISSのメンバーであるポール・スタンレー（スタンレー・アイゼン）はユダヤ系として知られているが、その名から阿史那氏の子孫だということがわかる。日本に入植した阿史那氏からは、名前もそのままに「蘆名氏」が生まれた。一方、蘆名氏からは「椎名氏」も生まれている。蘆名氏からは戦国時代の著名な武将、蘆名盛氏、蘆名盛興が生まれているが、彼らはダヴィデの一族に属するため、正統な阿史那氏の家系には含まれない。蘆名盛氏は実際には、日本にやってきたオスマントルコ皇帝スレイマン1世（宇佐美定満）の子である。宇佐美の由来はオスマンである（詳細は別著「ダヴィデの一族」を参照のほど）。

■月の神シンの遺伝子Ⅱ～清と愛新覚羅家

蘆名盛氏の孫、蘆名盛興が「愛新覚羅家」を生んだ。蘆名盛興に子はいないとされているが、それは子息を全員、満州に連れて行ったためである。末っ子のバヤラ以外のヌルハチら兄弟は全員、日本で生まれたと考えられる。愛新覚羅（アイシンギョロ）の由来は阿史那と加羅の組み合わせである。阿史那＋加羅＝愛史那加羅＝愛新覚羅（アイシンギョロ）となる。清（シン）の名の

由来もンジニ、或いはイシン、阿史那である。ただ、蘆名盛氏はオスマントルコ皇帝スレイマン 1 世の子であるため、愛新覚羅家はダヴィデの一族に数えられ、「愛新」や「清」に名前は受け継がれているものの、オリジナル人類ンジンニの末裔とは言えない。